

Ⅲ 学校評価自己評価

1. 学園保幼小中一貫教育報告一覧

学 園 名	「目指す子ども像」、教 育 目 標
1 峰山学園	【目指す子ども像】 「意欲を持って自ら学ぶ子ども（知）」 「思いやりのある子ども（徳）」 「進んで心と体を鍛える子ども（体）」 【教育目標】 「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」
2 大宮学園	(1) 教育目標 自他を尊重し、自ら学ぶ 子どもの育成 (2) 目指す子ども像 ○ 意欲的に学び、チャレンジする子ども（知） ○ 自他を大切にし、思いやりのある子ども（徳） ○ 心身を鍛え、活動的な子ども（体）
3 網野学園	【目指す子ども像】 あ：明るく元気に進んで学ぶ子 【知】 意欲的に学習に取り組む子ども み：みんななかよく支え合う子 【徳】 規範意識をもち、仲間と支え合う子ども の：のびのび生き生きやりぬく子 【体】 粘り強く心身を鍛え、やり抜く子ども 【教育目標】 将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす子どもの育成を図る教育の推進
4 丹後学園	「目指す子ども像」 ①ことばで伝え合い、主体的に学ぶ子 【知】 ②自分を大切にし、人を思いやれる子 【徳】 ③ねばり強く身体をきたえる子 【体】 教育目標 「夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」
5 弥栄学園	教育目標 「ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで、たくましく生き抜く子どもの育成」 目指す子ども像 (知) 知識と技を磨き、活用する子 *自ら課題に取り組む（自主的な姿勢） (徳) 自他の良さを知り、共に伸びる子 *仲間と知恵を絞る（対話的な学び） (体) 心身を鍛え、何事もやりぬく子 *解決策を探り、自信をつける（深い学び）
6 久美浜学園	[教育目標] 「ふるさとを愛し、意欲的に学び、やさしい心を持ち、根気強く努力する子どもの育成」 [目指す子ども像] (知) 意欲的に質の高い学力を身につけようとする子ども (徳) 自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子ども (体) 心身を鍛え、粘り強く最後まで、協力して取り組む子ども

2. 京丹後市立こども園、学校評価自己評価報告一覧

学 校 名	学 校 ・ 園 教 育 目 標
1 峰山こども園	“元気いっぱい 笑顔いっぱい こども園 だ～い好き！” ～いっぱい遊ぼう 夢中になって～ 1 生活に必要な習慣・態度を身に付け、健康な心と体で生きる力を育てる。 2 主体的に活動し、言葉を介してコミュニケーション力を育てる。 3 身近な人や地域とのかかわりをもつ力を育てる。 4 友達と関わりながら、夢中になって遊び込める環境を整えながら、持続力や協同力を育てる。
2 大宮こども園	人との関わりや体験を通して、心豊かでたくましく、生き生きと遊ぶ子どもの育成 ・心も体も元気な子どもの育成 ・のびのびと遊び、感性豊かな子どもの育成 ・人の話を聞き、自分の思いや考えを言える子どもの育成 ・自分も友達も大好きで、思いやりのある子どもの育成
3 網野こども園	『園児自らが主体的に環境に関わり、心豊かでたくましく生きる力を育てる。』 (あ)明るく元気で主体的に活動する子どもの育成 (み)みんななかよく思いやりのある子どもの育成 (の)伸び伸び生き生きやりぬく子どもの育成 <テーマ> 『どきどき わくわく きらっ！ ひとりひとりがかがやいて』
4 丹後こども園	・生活や遊びの中で様々なことに心を動かし、豊かな園児を育む。 ・地域に愛され、保護者に信頼される園づくりを進める。 ・資質向上を目指し、職員同士が互いに学び合える組織づくりを進める。
5 弥栄こども園	1 生活に必要な習慣・態度を身に付け、健康な心と体を育てる。 2 自ら様々な環境に関わり意欲的に遊ぶ中で豊かな心を育てる。 3 身近な人や地域と関わり、思いやりの心や人権意識、規範意識の芽生えを育む。

学 園 名	「目指す子ども像」、教 育 目 標
6 かぶと山こども園	こども園教育目標 「元気な体と豊かな心、生きる力を持った たくましい子ども」 《元気 勇気 笑顔 つながれ仲間》 ～のびのび いきいき 仲間と共に輝いて～～ 1 園児自らが興味関心をもって環境に関わり、心豊かでたくましく、生きる力を育てる。 2 人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、人権を大切にする心を育てる。 3 相手の思いを受け止めながら、自分の思いや考えを表現する力を育てる。

学 校 名	学 校 ・ 園 教 育 目 標
7 峰山小学校	多様な人々と協働し、個性や能力を発揮して主体的・自律的に生きる力を育てる。 1 自ら学び、学んだことを伝え合う子どもを育てる。 2 生き方・在り方を深く考え、自律して行動する子どもを育てる。 3 よりよい社会をつくろうと力を合わせる子どもを育てる。
8 いさなご小学校	教育目標 「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」 目指す子ども像 1 意欲を持って自ら学ぶ子ども 2 思いやりのある子ども 3 進んで心と体を鍛える子ども
9 しんざん小学校	1 一人一人が自己肯定感を持ち、いきいき活動する学園 2 「中学校卒業時の子どもの姿」に全教職員が責任を持つ学園 3 保護者・地域に信頼される学園
10 長岡小学校	「峰山学園」の経営方針を踏まえ、教育活動全体を通して学園教育目標「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」に迫る。 〈峰山学園 めざす子ども像〉 ・意欲を持って自ら学ぶ子ども（知） ・思いやりのある子ども（徳） ・進んで心と体を鍛える子ども（体）
11 大宮第一小学校	「学校教育目標」（長期目標） ◆自他を尊重し、自ら学ぶ こどもの育成 「目指す学校像」 ◇一人一人が輝き、生き生き活動する学校【児童】 ◇やりがいを持って自分の力を発揮する学校【教職員】 ◇安心して子どもを任せられる学校【保護者】 ◇他の地域に誇れる地域とともにある学校【地域の方】
12 大宮南小学校	「自他を尊重し、自ら学ぶ 子どもの育成」 ・意欲的に学び、チャレンジする子ども ・自他を大切にし、思いやりのある子ども ・心身を鍛え、活動的な子ども 大宮学園「教育目標・目指す子ども像」の実現を目指し、学園の園所や小中学校の保育・教育から謙虚に学び、常に自校教育の改善に努める。
13 網野北小学校	1 落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2 規範意識を醸成し、思いやりをもち仲間と共に生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 3 すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 4 自然・人・社会とのつながり、郷土を愛する心を育てる。
14 網野南小学校	網野学園基本方針より 1 落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2 規範意識を醸成し、思いやりをもち仲間と共に生きる豊かな人間関係を築く力を育てる。 3 すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 4 自然・人・社会とつながり、郷土を愛する心を育てる。
15 島津小学校	1 落ち着いた学校、学び合いのある授業により学力を付ける。 2 規範意識を醸成し、思いやりをもち仲間と共に生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 3 すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 4 自然・人・社会とのつながり、郷土を愛する心を育てる。
16 橘小学校	【教育目標】 「将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす児童・生徒の育成を図る教育の推進」 【目指す子ども像】 あ：明るく元気に進んで学ぶ子 【知】意欲的に学習に取り組む子ども み：みんななかよく支え合う子 【徳】規範意識を持ち、仲間と支え合う子ども の：のびのび生き生きやりぬく子 【体】粘り強く心身を鍛え、やりぬく子ども
17 丹後小学校	教育目標（丹後学園共通） 「夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」 ＜目指す学校像＞ 1 よく考え学ぶ学校 2 友だちと仲良くする学校 3 最後まで粘り強く努力する学校 4 家庭・地域のつながりを生かした学校
18 宇川小学校	夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成 ○目指す子ども像 (1)言葉で伝え合い、主体的に学ぶ子(知) (2)自分を大切にし、人を思いやれる子(徳) (3)ねばり強く身体を鍛える子(体)
19 吉野小学校	1 生徒指導の実践上の視点を生かした授業づくりを推進し、生きる力の確実な習得と、言語能力を高め、課題解決に向けて思考力を育む教育の推進 2 主体的に行動できる力と豊かな人間性を育み、個々が大切にされる心の教育を推進する。 3 学園の保幼小中一貫教育を、校種間における様々な取組等を充実させながら推進する。 4 家庭、地域とつながり、信頼される学校、特色のある学校づくりを推進する。
20 弥栄小学校	「ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで、たくましく生き抜く子どもの育成」 ・知識と技を磨き、活用する子 ・自他の良さを知り、共に伸びる子 ・心身をきたえ、何事もやりぬく子

学 校 名	学 校 ・ 園 教 育 目 標
21 久美浜小学校	教育目標【久美浜学園全体】 「ふるさとを愛し 意欲的に学び やさしい心を持ち 根気強く努力する子どもの育成」 目指す子ども像【久美浜学園全体】 （１）意欲的に質の高い学力を身に付けようとする子ども（知） （２）自ら正しく判断、行動し、豊かな心を持つ子ども（徳） （３）心身を鍛え、粘り強く最後まで、協力して取り組む子ども（体） 重点目標【久美浜学園全体】 「意欲的に生活・学習に取り組む子どもの育成」 ～ 子どもの実態や系統性を踏まえた指導 ～ 指導の重点『学力の向上』 ①基礎・基本の徹底 ②主体的に学ぶ力の伸長 ③家庭学習時間の確保 校訓「一生懸命」を意識した教育活動の推進 指導キーワード「ポストコロナを受け【創造と協働】」的な業務推進
22 高龍小学校	学習・生活に生き生き取り組むたくましい子どもの育成 ― アセスメントを踏まえた系統的な指導 ― １ 主体的に学ぶ力の伸長（授業づくり） ２ 集団での学びの質の向上（学級づくり） ３ 家庭学習習慣の定着
23 かぶと山小学校	１ 久美浜学園教育目標 「ふるさとを愛し、意欲的に学び、やさしい心を持ち、根気強く努力する子どもの育成」 ２ めざす児童像 （１）意欲的に質の高い学力を身につけようとする子 （２）自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子 （３）心身を鍛え、粘り強く最後まで協力して取り組む子
24 峰山中学校	【教育目標】 自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ生徒の育成 【めざす生徒像】 ・意欲を持って自ら学ぶ生徒 ・思いやりのある生徒 ・進んで心と体を鍛える生徒 【重点課題】（社会的自立につなぐ教育） ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を図り、「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善の推進と学力の向上 ・「探究的な学び」を通じて課題解決能力をはぐくむ教育を推進 ・つながる力を生かした豊かな人間性の育成と不登校の解消・未然防止
25 大宮中学校	大宮学園教育目標 「自他を尊重し、自ら学ぶ子どもの育成」 大宮中学校重点目標 「ふるさとを愛し、夢や希望をもって未来を切り拓く、心豊かでたくましい生徒の育成」 ～子どもたちの「がんばろう」という気持ちを引き出し高める指導を目指す～ １ 夢や希望を持って未来を切り拓く能力と実行力の育成 ２ 学習意欲を高める授業改善と家庭学習の定着 ３ 健康な体と豊かな心の教育の充実 ４ 信頼され、開かれた学校づくり ５ 教職員の資質能力の向上 ６ 大宮学園保幼小中一貫教育の推進
26 網野中学校	将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす生徒の育成を図る教育の推進 １ 規範意識を醸成し、落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 ２ 未来を展望し、自ら未来を切り拓く力を付ける。 ３ 思いやりをもち仲間とともに生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 ４ 自然・人・社会とつながり、郷土を愛する心を育てる。
27 丹後中学校	○確かな学力の育成とわかる授業づくりのための不断の工夫改善 ○豊かな心と健康な体をはぐくむ教育の充実 ○進路指導の充実 ○信頼される学校づくり ○保幼小中一貫教育の充実の推進による教育活動の充実
28 弥栄中学校	１ 全教職員で、生徒・保護者との信頼関係を築くとともに、生徒・地域の実態をよくつかみ、学校の活性化に全力を注ぐ。 ２ 主体的に学び、たくましく心身を鍛え、人権尊重を基に人間性豊かな生徒を育む教育課程の編成と実施に努める。 ３ 基礎的・基本的内容の指導の徹底と定着を図る授業づくりを進める。 ４ 知識技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力を育んでいく。 ５ 未来を拓くために主体的に進路選択ができる能力を育てる。
29 久美浜中学校	＜久美浜学園＞ 指導の重点：学力向上 （１）基礎・基本の徹底 （２）主体的に学ぶ力の伸長（授業づくり） （３）家庭学習時間の確保 ◇規範意識の醸成を基盤とし、当たり前のことが当たり前に見える学校、「命」「今」「仲間」を大切にする学校を目指す。 ◇久美浜学園保幼小中一貫教育の一層の推進により、指導観について共通理解を図り、系統的、組織的な教育実践を推進する。 １ 非認知能力の伸長と、「主体的・対話的で深い学び」を追求した授業の充実による学力の向上 ２ 好ましい人間関係の構築と自己肯定感・自己有用感の向上 ３ 不登校の未然防止と不登校（傾向）生徒の改善 ４ 「久美浜学園学校運営協議会」を核とする地域力と学校力を統合した、地域ぐるみの子育て支援体制の確立 ５ アフターコロナにおける「新しい教育の創造」

令和5年度 峰山学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」、教育目標

【目指す子ども像】
「意欲を持って自ら学ぶ子ども（知）」
「思いやりのある子ども（徳）」
「進んで心と体を鍛える子ども（体）」
【教育目標】
「自己肯定感を持ち、自分の将来を展望し、共に学ぶ子の育成」

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

指導の重点「確かな学力の育成（授業研究）」「コミュニケーション能力の育成」「評価を見通した取組の充実」を各こども園・小・中学校の教育活動や校内研究・研修に位置付ける。

(1) 確かな学力の育成

他者と関わりながら深く学び、社会的に自立して主体的に生き抜くための学力を育てる。

そのために、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた教育を土台にして、幼児期から中学校まで一貫した教育を進める。（遊びや授業の研究）

ア 「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習や遊びを進める。

- ①学習や活動に関心をもち、粘り強く取り組み、次につなげようとする主体的な学び・遊び
- ②他者との対話やかかわりをもとに考え、自分の考えを広げ深めようとする対話的な学び・遊び
- ③見方・考え方を働かせながら、関連付けたり情報を整理したり探究したりして問題を解決しようとする深い学び

イ（小・中学校）タブレット等のICT器機を効果的に活用する。

ウ（小・中学校）目標から遡って、評価方法を先に設計し、それを踏まえた指導計画と授業設計に努める。

(2) コミュニケーション能力の育成

遊びや学習を通して、ことばによる伝え合いを軸とした学びや、他者との共感的人間関係を育成することなど、自立に向けて幼児期から中学校までの一貫した実践を進める。

ア 幼児児童生徒が安心できる「居場所づくり」（存在感・充実感）を進める。

イ お互いを認め合う心の醸成を図る。

ウ 人とつながる楽しさを味わわせ、ことばで伝え合う力を育む。

(3) 評価を見通した取組の充実

ア 学園評価・学校評価の結果に基づく学園経営の充実

イ 教育評価・指導評価の結果に基づく教育実践の改善

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	(1) 学園内の全ての園・学校が、目指す子ども像・教育目標を共通化 (2) 学園内の全ての園・学校が、学園経営方針を各学校の経営方針へ位置付け	(1) 幼児児童生徒の実態や課題などや目指す子ども像、目標方針の共有について ○年度当初の研修会を集合型で実施し、峰山学園の幼児・児童・生徒実態から明らかにした経営方針を全教職員で確認し、運営できた。 ○児童・生徒の状況については、各会、部会で共通理解を図り、取組に生かしている。担任会でも、児童の状況について交流し、指導方法を学び合うことができた。 (2) 学校運営及び進行管理 ○経営会議を定期的開催し、学園内の教育課題の把握・整理を行いながら、教育目標・目指す子ども像の実現を目指して経営を行うことができた。

	(3) 学園内の全ての園・学校が、学園経営の課題・重点について各学校の経営方針へ位置付け	○経営会議で、運営会議、教育課程会議、生徒指導部会、学習指導部会の取組等を把握するとともに方向性を確認することができた。 ○今年度も共同学校事務室室長も経営会議に参加して学園の重点や取組を把握し、児童生徒の学習環境や学園予算の検討など、共同学校事務室の運営に活かすことができた。 ○学園児童・生徒アンケート、教職員アンケートの結果について、運営会議で丁寧に分析し、成果と課題を踏まえた次年度の方向性を考えることができた。経営会議、事務局会議でさらに具現化を図るために改善策を考えていく。 ●運営会議で計画はするが、教頭が行事へ参加できていない状況であるため、教頭が参加できるよう校内で調整する。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	(1) 峰山学園の目指す子ども像を見通した指導と教育課程の作成 ア 自己肯定感を育てる授業づくり・生活づくり ・学習指導要領の趣旨を踏まえ、確かな学力の充実・向上のために、「主体的・対話的で深い学び」の実現による授業改善 ・GIGA スクール構想に基づき、授業展開の一部分としてICT利活用の推進及び学園内でのオンライン合同学習の可能性探究 イ 0期～Ⅰ期、Ⅰ期・Ⅱ期(汽水域を含む)・Ⅲ期の指導目標を踏まえた一貫した指導 ＜(0) Ⅰ～Ⅲ期における『目指す姿』一覧＞ ・小6児童の不安感や中1生徒の困り感の再検証…中1ギャップの捉え直し ・目標から遡り、授業を逆向きに設計した単元構想による授業研究 ・京丹後市保幼小中一貫教育モデルカリキュラムの積極的な活用 ・学力充実期間等 ・指導体制の工夫 ・小学校高学年での一部教科担任制 ・中1ふりスタ(正式名称中学校1年生集中振り返	「(0) Ⅰ～Ⅲ期における『目指す姿』一覧」を踏まえ、担任会で峰山学園の児童生徒に付ける力の検討を行ってきた。児童生徒の実態や課題、目指す子ども像の共有を図った。 (1) 0期、Ⅰ期～Ⅲ期をより意識した指導 ○経営会議で決定したことを各校へ持ち帰り、全教職員に周知することにより、目指す子ども像の実現に向けて実践を積み上げることができた。 (2) 就学前から中学卒業までを見通して一貫した指導の充実、教育課程編成 ○年間10回の経営会議を実施し、10年間を見通した指導について取組を進め、保幼小中一貫教育を推進することができた。また、教育支援部会、こども園参加の1年担任会・教育課程会議の取組で、園児・児童が付けた力を踏まえ各期の「接続」を意識した支援を行うことができた。 ○年4回の全教職員の研修会を研究の節目として位置付け、「一貫した指導」について共有し、実践の成果を明らかにしてきた。学園の教職員が一堂に会して学ぶことで方向性を再確認し、指導にあたることができた。 ○指導の重点である確かな学力の育成を目指し、今年度から重点目標を変更し、「主体的・対話的で深い学び」を視点①②③と具体的に示し、児童生徒が主体的に学びに向かう授業改善の視点を明確にして実践できた。 ○秋季研修会はしんざん小学校1校で開催し、3学級の授業公開、事後研究会を実施した。子どもが主語になる視点を持つ授業を学ぶことができた。事後研究会では、小学校・中学校の教員が交流し、授業観やICTの活用について深められた。 1校の研究を全員で参観・共有できる良さがあるため、次年度以降も1校開催とする。 R6:長岡小 R7:峰山小 R8:いさなご小 R9:しんざん小 ○●担任会の協議内容として、教科や単元を決めて教材研究ができた。しかし、つけたい力を明確にし、目標からさかのぼって授業設計する必要性の提起が弱かった。指導の重点(1)ア③にあるように「見方・考え方」を働かせながら問題を解決する深い学びのための教材研究としたい。5・6年担任会には中学校教員も参加しているので、Ⅱ期の修了を見通し「中1ギャップ」についてさらに研究していく。 ○家庭学習については「学びに向かう姿勢」「自ら

	り学習) ・小学校4年生ふりスタ ・中学校体験授業(年1回) ・「5年生・6年生の心構え」 ・夢・未来式(小学校4年生)、立志式(中学校2年生) ウ 園小の接続を中心とし教育課程の編成と一貫した指導 ・アプローチカリキュラム、スタートカリキュラムの実践と検証 (今年度は「幼保小架け橋プログラム」の内容を反映したスタートカリキュラム、アプローチカリキュラムになるよう見直す。) (2)不登校・いじめの解消 ア 「5・6年生の心構え」と各校の実態を踏まえて、積極的な生徒指導を行うとともに、生徒指導の4つの視点を生かした学級づくり・授業づくりについて研究 イ 不登校の未然防止に向けて組織的な取組を進める。 ・学園内で気になる子どもの実態交流を行い、幼児期・学童期・思春期の変化とその時期に大切な支援や指導について研究 ・各期で移行支援シートを丁寧に作成・引き継ぐ (移行支援シートは活用できるように毎年見直す。) ・教育支援部会で具体的な事例研究(SC・SSWの専門的な見立てからの学び)	計画的に学ぶ具体的な方法を身に付ける」等の視点を持ち、各校で実践した。系統表・取組方法など、教育課程会議で研究を進められた。 ○教育課程会議で「家庭学習において目指す姿」の系統表が作成され、つきたい力が明確になった。今後、各校で共通理解を図り浸透させていく。 ○「夢・未来式」「立志式」に取り組み、自分の夢や将来について意識向上につながった。第4学年をI期の修了学年ととらえ、自分の成長・将来への展望について各校で取組を進めることができた。その方向性については、年度ごとに経営会議で確認し、各校の実情を踏まえ、学園としてのねらいや趣旨を共通化して、育成すべき力の実現を目指す。 ○1年担任会では、こども園の園長・担任がすべて参加し園小連携を行った。こども園・小学校での指導を交流・理解し、それぞれの指導に活かすことができた。 ○こども園から小学校へ、小学校から中学校への子どもに関わる情報の引継ぎについては、個人情報であることを踏まえ、対応と内容については、毎年確認をして連携する。 アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムを見直し、園で育んだ力(10の姿)を小学校の指導に生かせるように研究・実践した。文科省「幼保小架け橋プログラム」に照らし合わせての研究としては弱かったが、1年担任会、教育課程会議で幼小連携について研究し、各校の実践につなげることができた。 ○こども園の参観は2つの園・時間を区切って参観者を調整して実施した。短時間ではあったが、10年間のスタートである0期の実践を参観して、自分から人と関わるための環境設定や、思いや行動を引き出すために、どのようにことば掛けを行っているかを学んだ。参観後の交流は取れないが、感想は紙面でこども園に提供できた。次年度も、夏季研修会の午前中に参観し、午後の全体研修では幼児期の指導について基調提案を行う。 ○各校で積極的な生徒指導の取組として児童会・生徒会活動等だけでなく、日々、肯定的な評価や違いを認める指導を行っており、おおむね落ち着いた状況で生活できている。 ○SNS アンケート実施・結果分析・活用、篠原講師によるSNS講演会等の取組を通して、SNSに係る指導を小・中学校で進めることができた。今年度は、7月に講習会を実施でき、夏休み前の指導に活用できた。 ●SNSにかかる指導については、メディアコントロールが弱い実態を踏まえ、峰山学園PTAとの連携が必要である。 ●「5・6年生の心構え」は、令和3年度に変更して現在の内容になっている。内容を変更した趣旨を共有し、全員で確認をしながら指導を進めていく必要がある。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	(1)「目指す子ども像」の実現 ⇒教職員の協働及び教職員の交流 ア 教職員の合同研修会・実践交流の実施 イ 授業づくりを通じた研修会	○「主体的・対話的で深い学び」を推進するために、学習指導部が作成した「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、こども園、小・中学校で大切にしている視点に沿って各小中学校ともに授業研究に取り組むことができた。 ○全教職員の研修会・各部会を通して、教職員の交流を図ることができた。夏季研修会については、関西国際大学 中尾教授に特別支援につい

	ウ 担任会を通した研修 (2)「集団の中で豊かに人とかわる力」や「コミュニケーション能力」を高めることを目的とした子どもの交流を図る行事等の計画・実施 ア 峰山中学校合唱祭(今年度は6年生の参観なし。取組紹介) イ 部活動体験 ウ 合同授業・学びの交流等 エ 体育祭等(今年度は6年生の参観なし。取組紹介) オ 「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業実践 カ クリーンキャンペーン キ SNS 講演会	での講演をしていただき、発達障害について、児童生徒の見方や支援の仕方について学んだことから、指導の一貫性につながった。 ○特別支援学級「ふれあい交流会」では、小学校1年生から中学生までが楽しめる内容が工夫され、中学生が中心となって進め交流できた。中学生が良きリーダーとして活躍できた。 ○部活動体験・体験授業・ふれあい交流会等、児童生徒が交流を通して中学校への不安を軽減することができた。部活動体験は次年度も2回計画する。(1回目は全員参加で2回目は自由参加)部活動体験では、相手のことを考えて行動する中学生の姿から「あこがれ」を感じることもできた。 体験授業については、児童は中学校のイメージが身近なものになったり、他校の児童と交流できたりしたことが感想からわかる。児童の主体性を重視し、希望する教科学習に意義を見出せるようにし1回の実施とする。 クリーンキャンペーンは天候により中止としたので、今年度の内容で次年度実施し検証していく。 ●部活動体験、体験授業は8月以降の取組である。1学期から中学校への見通しを持たせるために、1学期に合唱祭の取組の参観等を計画していく。
家庭、地域との連携、情報発信	(1)中学校区の家庭教育の課題(基本的な生活習慣や家庭学習習慣の確立、ほめて育てる家庭教育等)を踏まえた「峰山学園」PTA統一目標の設定 (2)「峰山学園」PTA統一目標に沿った校区全体及び各学校での具体的取組の計画・実施 (3)「峰山学園」学校評価に基づく学校関係者評価委員による評価の実施と学園の目標、教育活動の保護者・地域住民への積極的な情報発信 (4)峰山町民が学園の教育活動に積極的に参加し、支援できる仕組み(学校支援ボランティア 峰山学園学校運営協議会等)の機能化と充実	○学園の課題(基本的な生活習慣や家庭学習習慣の確立、ほめて育てる家庭教育等)と連携した峰山学園PTA統一目標を策定し、具体的に「峰山学園PTAみんなでおはよう運動及び交通安全指導」を実施できた。今年度から、こども園でもおはよう運動の取組に参加してもらう等、新しい動きが出てきた。 ●小中一貫校PTAとの連携も強化し、家庭学習の習慣化、主体的に取り組む力の育成を図る。 ○保幼小中一貫教育学園コーディネーターの役割を明確にし、学園だより・ホームページ・リーフレット等での発信が定着しており、学園の教育活動を保護者・地域に丁寧に広報することができた。 ○峰山学園地域コーディネーターを窓口とし、学校支援ボランティア等を活用し、話を聞いたり体験したりする機会を設けて学べた。地域の方が学校教育活動に積極的に参加できる取組を進められた。 ○学校運営協議会での話し合いが「地域とともにある学校」をめざしていく上で、新たな気づきや視点を得られる場となっている。

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
《成果》 1 児童生徒、教職員アンケート結果より ・峰山学園の保幼小中一貫教育の成果を積み重ね児童生徒の課題解消や軽減等が進んでいる。 2 峰山学園の教職員のアンケートから、確実に保幼小中一貫教育で目指している一貫した指導が浸透してきていることが窺える。今年度の重点の「確かな学力」の「主体的・対話的で深	○担任会の取組の継続・発展 担任会…今年度の体制を維持し次の内容に取り組む。 ①学年の学習内容の復習のための課題づくり ②算数の単元総括テストに特化することを改善し、教材研究を他教科にも広げ指導力の向上を図る。 ③0期～Ⅲ期の指導目標を踏まえた指導の充実

い学び」で目指す姿を示して実践できた。 3 学園経営及び進行管理について ・経営会議が運営会議、教育課程会議及び生徒指導部、学習指導部などを統括しながら進められた。 ・経営会議、運営会議、教育課程会議、学習指導部会、すべての会議において「何のための取組か」「子どもにどんな力を育むのか」を問い直し、行事や取組を見つめ直してきた。同じ取組でも、その視点で成果課題をとらえてきた。この歩みが、10年の節目を迎え、次年度の方向性を検討する際に活かされている。 ・担任会が授業づくりの実践推進を担うよう学習指導部と連携するとともに、中学校教員・こども園教員も参加し、機能的な組織体制にした。その結果、授業改善や学力向上に繋がる実践を取り組むことが出来た。 4 10年間を見通した一貫した取組について ・「目標と指導と評価の一体化」を具体化するための実践を担任会に位置付け、昨年までの算数科単元総括テストの作成の手法を活かし、他教科の教材研究に波及することができた。 ・「主体的・対話的で深い学び」を実現するために大切にしている視点に沿って、授業研究会等での実践交流を通して、授業改善を図ることができた。 ・家庭学習については、指導の系統、目標の検証を行い、家庭学習の目的、内容や方法、授業とのつながりを検討し、目指す姿を示した。 ・児童生徒に基礎基本の力を身に付けさせるため、小4ふりスタ・6年生春季宿題の共通化・中1ふりスタ等の取組を継続・充実させることができた。 ・各校で積極的な生徒指導の取組として児童会・生徒会活動等だけでなく、幼児児童生徒が安心できる「居場所」づくりを進め、お互いを認める心の醸成を図った。また、「夢・未来式」「立志式」にも取り組み、成長を実感し自分の将来を展望する意識を向上させることができた。 ・「主体的・対話的で深い学び」を実現するためにこども園・小学校・中学校で大切にしている視点を見直し、各校で実態に応じた授業づくりに関わる研究を進めた。秋季研修会で小学校1校の授業研究会を行った。具体的な児童生徒の姿から、児童が主体となる授業の在り方やICT活用について学び合うことができた。協議を通して目指したい児童生徒の姿や授業づくりで大切にしたい視点を明確化したり共有化させたりすることができた。 ・年度末研修会において、中学校の授業研究会を行い、事後研の中で授業について、ケーススタディで学ぶとともに、今後10年を見通し、どんな力を育むか意見を出し合った。それぞれの学園に対しての参画意識が高められた。 ・アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムを見直し、特にスタートカリキュラムは時間をかけて小学校の学習・生活に適応できるよう修正した。 ・学園評価アンケートの分析は、運営会議が中心となって担うことで、自校・学園の課題把握ができ、教頭として改善方策を検討する等、広い視野につながった。 ・保幼小中一貫教育コーディネーターの役割を明確にし、学園だより・ホームページ・リー	を図る。 ④5・6年生の担任会には中学校も参加しているため、中学校の実態から「中1ギャップ」解消に向けた指導を検討する。 ○小4（Ⅰ期とⅡ期の節目）に焦点化して研究推進してきたが、今後それぞれの節をより確かなものにするために研究・実践の幅を広げていく。6・3制のもとで定着している教育課程の意識や行事・取組等を検討し小中一貫した教育課程の無理のない移行を図る。 ○こども園から小学校への連続性、効果的な接続の在り方について、より一層重点的に取り組むため、「幼保小架け橋プログラム」を反映したアプローチカリキュラム、スタートカリキュラムとなるように見直す。 ○教員の研修会 授業づくりを中心とした協議を行い、小中学校で指導力の向上を図る。こども園の参観を行い、0期のスタートにおいて大切にしていることを理解し、一貫性についての理解をさらに進める。 ○令和5年度の目指す子ども像・教育目標・目指す教師像について、保幼小中一貫教育推進の手引きをもとに検討を行う。 ○ 保幼小中一貫教育の具体的な内容 1 児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標方針の共有に向けて (1) 学園内の全ての学校が、目指す子ども像・教育目標を共通化 (2) 学園内の全ての学校が、学園経営方針を各学校の経営方針へ位置付け (3) 学園内の全ての学校が、学園経営の課題・重点について各学校の経営方針へ位置付け 2 就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程 (1) 峰山学園の目指す子ども像を見通した指導と教育課程の作成 - ア 自分の居場所を感じる授業づくり・生活づくり 不登校児童生徒が増加している実態を踏まえ、心理的安全性を高める学級づくりをめざす。 - イ 汽水域を中心とした教育課程の編成と、一貫した指導 ・小6児童の不安感や中1生徒の困り感の再検証 峰中（中1）ギャップの捉え直し ・京丹後市保幼小中一貫教育モデルカリキュラムの積極的な活用 ・家庭学習と授業づくりの関連 家庭学習は授業で習得した学びを自分で実践する場と捉え、日常の主体的・対話的で深い学びをめざした授業づくりを深める。 ・小学校高学年での一部教科担任制(外国語科) ・中1生集中振り返り学習 ・中学校体験授業（年1回） ・「夢・未来式」（小4）、立志式（中2） - ウ 0期Ⅰ期～Ⅲ期の目指す姿を達成できる指導について協議、実践していく。
--	--

フレットの作成を行い、学園の教育活動を保護者・地域に丁寧に広報することができた。 ・不登校の未然防止に向けて、学園内で気になる子どもの情報交流をすることで、幼児期・学童期の過去の様子や家庭の情報などを得ることができ支援や指導に繋がった。 《課題》 1 令和6年度学園経営に向けて (1) 組織体制及び運営上の改善 ・10年間を見通した連携・一貫した指導となるよう分掌や分掌の任務の改善を進める。特に、0期～Ⅲ期に目指す児童生徒像を目指した指導をさらに進める。 (2) 令和6年度に向けての重点的な課題・取組の方向 【教育目標・目指す子ども像・学園経営方針】 ・令和5年度までの10年間の成果を大切にしつつ、課題を焦点化して改善を進める。今後10年を見据え、新しい教育目標を設定し、PDCAサイクルで、学園経営を行っていく。 【学園指導の重点】 ・授業研究については、学習指導部会が中心となって「主体的・対話的で深い学び」を実現するために大切にしている視点を基に行う。小中全教職員が授業研究に関わるためにも、各校で視点を明確にした実践を積み上げる。こども園においても、遊びの中で育てていく。 ・夏季研修については、教職員の指導力量を高めていく取組の大きな節としていく。特に、保幼小中連携に焦点を当てた取組とするため、こども園の参観・幼児教育についての基調提案を行う。 ・タブレットの活用が幅広く図られ「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指して授業改善が行われた。今後はさらなる効果的な活用を推進する。 ・「確かな学力の育成」「コミュニケーション能力の育成」では、人とつながる楽しさを味わわせ、ことばで伝え合う力を育む実践を進める。 ・不登校の解消に向けて、今年度の取組を継続するとともに、関係機関との連携を更に深め、個に応じた対応から社会的自立につながる指導を展開する。 ・生徒指導部会では、各校で取り組まれている積極的な生徒指導の取組を交流し、コミュニケーション能力を育成し、豊かな人間関係の構築を目指す。同時に、指導者として各学年・発達段階に応じてそのためにどのような手立てが必要か検討していく。 ・支援を要する児童生徒に対して、指導や支援の方法をより一層工夫・連携していく必要がある。 ・学園評価について、方針に基づいて早い段階から、評価の計画・見通しを持ち、学園学校運営協議会での評価により指導の改善を図る。 ・担任会においては、算数の単元総括テストに特化することを改善し、教材研究と交流を行う。特に5・6年担任会には中学校からも参加しているため「中1ギャップ」について実態交流し、解消できるよう検討していく。 【保幼小中一貫教育の具体的な内容】 ・0期・Ⅰ期～Ⅲ期の実践を明確にし、小中一貫教育の姿を確認する。	・「小中学校で共通確認する指導の視点」について見直しを行う。 ・「5・6年生の心構え」については、児童生徒の実態を踏まえ、検討を継続していく。 エ 園小接続を中心とした教育課程の編成と一貫した指導 ・アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムの実践と検証 ・こども園で身につけた力を発揮する接続 オ 府「学びのパスポート」の質問項目と学園評価アンケートの活用 ・「学びのパスポート」は5月実施、学園のアンケートは12月実施であることから、学園のアンケートの項目を再考し、活用方法についても検討する。 3 子ども、教職員の交流と協働 (1) 「目指す子ども像」の実現・「目指す教師像」の意識化⇒教職員の協働及び教職員の交流 ア 教職員の合同研修会・実践交流の実施 イ 授業を通じた研修会 ウ 担任会を通じた研修 (2) 「集団の中で豊かに人と関わる力」や「コミュニケーション能力」を高めることを目的とした子どもの交流を図る行事等の計画・実施 ア 峰山中学校合唱祭練習参観 イ 部活動体験（2回） ウ 「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業実践 エ 学校や地域の一員として主体的に参加する取組 オ クリーンキャンペーン カ SNS講演会（峰山学園主催、運営：運営会議・生徒指導部） 4 家庭、地域社会への積極的な情報発信 (1) 峰山学園学校運営協議会による評価の実施と学園の目標、教育活動の保護者・地域住民への積極的な情報発信 (2) 中学校区家庭教育の課題（基本的な生活習慣や家庭学習習慣の確立、ほめて育てる家庭教育等）を踏まえた「峰山学園」PTA統一目標の設定 (3) 「峰山学園」PTA統一目標に沿った校区全体及び各学校での具体的取組の計画・実施 (4) 学園の教育活動への支援体制（学校支援ボランティア等）の機能化と充実 (5) SNS講演会（保護者向け）については、小中一貫校PTAの取組として位置付け、各校PTAの計画等にも組み入れる。地域にも発信し地域と連携した取組に広げていく。
--	---

令和5年度 大宮学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」、教育目標

- | | |
|-------------|--|
| (1) 教育目標 | 自他を尊重し、自ら学ぶ 子どもの育成 |
| (2) 目指す子ども像 | ○意欲的に学び、チャレンジする子ども（知）
○自他を大切にし、思いやりのある子ども（徳）
○心身を鍛え、活動的な子ども（体） |

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

- ※大宮学園を支えるのは「人権教育」そして「ことばの力」の育成
- (1) 確かな学力の育成：「授業づくりの視点9」「言語活用カリキュラム」の活用
 - ①基礎学力の向上を目指した授業改善（授業づくり）
 - ②小中で連携した「主体的・対話的で深い学び」の実現による授業改善（授業づくり）
 - ・「主体的・対話的で深い学び」を通して、「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」を育成する授業研究を充実させる。
 - ・授業研究会・保幼参観の開催 6月：(大宮第一小) 8月：(大宮こども園) 11月：(大宮中)
 - ③「ことばの力」の育成（言語活動の充実）を目指した授業改善（授業づくり）
 - ・言語活用カリキュラムの積極的な活用を年間通じて進める。（学力充実部会、担任会）
 - ④保幼小の接続のためのアプローチプログラム・小1スタートカリキュラムの自学園化
 - (2) 人権意識の育成：「人権教育カリキュラム」の活用
 - ①人権教育の理念に基づく「自他を大切にする心」を育成するための教育活動の充実
 - ・全ての教育活動で「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」の育成し、そのための授業づくりの推進（各教科指導で3つの力を育成する指導を充実させる。）
 - ・特に、授業や特別活動等を通じて、「話し合い活動」の充実を図る。
 - ②人権意識を育成するための人権学習の充実
 - (3) ICTの積極的活用も含めた連携・体験活動の充実
 - ①ICTを活用した効率的・効果的な連携教育活動・体験活動の充実
 - ②体験活動を通して「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」の育成
 - ③効率的・効果的な共通した学校のきまり（学習・生徒指導・家庭連携）
 - ④丹後学・キャリア教育の視点を踏まえた夢・未来式（小4・中3）の実施
 - (4) 目指す子ども像の実現を見通した教職員の交流と協働
 - ①学園の教職員が確実に出会い、話し合う機会の確保
 - ②担任会の充実
 - (5) 家庭、地域社会への啓発、情報発信
 - ①ホームページ、たより等を活用した情報発信
 - ②大宮学園の家庭教育の課題を踏まえた「大宮学園」PTA・保護者会の協働
 - ③家庭教育委員会による「家庭のやくそく」の継続と啓発、親のための応援塾の継続
 - ④大宮学園学校運営協議会での学園教育環境づくりの推進
 - ⑤「大宮学園」学校評価の実施と保護者・地域住民への啓発

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	(1) 学園内の全ての学校園所が、教育目標、目指す子ども像を共通化する。 (2) 学園内の全ての学校園所が、学園経営計画を各校の経営計画へ位置づける。 (3) 学園内の全ての学校園所が、学園	(1) 学園教育目標及び目指す子ども像に向けて、学園内の2園所、3校での共通化に取り組んだ。 (2) 学園経営計画を各園所、学校の経営計画に位置づけ、経営の充実に取り組んだ。 (3) 学園教育課題、各会議・部会の推進状況を把握し、学園経営を統括し、一貫した教育指導・活動の充実に努めた。 (4) 最大の課題となる不登校について、共通認識と

	の子どもの実態・課題、学園重点方針等を各校の経営計画へ位置づける。 (4) 学園保幼小中一貫教育推進部会による実践研究成果を各校に波及させる。	連携の在り方について協議を重ね、指導支援に生かした。特に、教育支援部会で事例研究を通して不登校への理解と支援の在り方について研修を積み重ねることができた。 (5) 保幼小中移行支援シートを活用した児童生徒の支援の引き継ぎを丁寧に行うとともに、SCやSSWの活用を進めた。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	(1) 大宮学園教育課程の編成 ①汽水域指導プログラムの推進等 ・小中学校での乗り入れ授業の計画・実施（加配の活用） ・小学校5・6年での一部教科担任制 ・中学校授業体験（年2回予定～実技教科と五教科） ②Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期の学習への円滑な接続 ・アプローチプログラム、小1スタートカリキュラム（5歳児担任・小1年担任） ・夢・未来式の実施（小4・中3） ・小4・中1ふりスタ ・中学校定期テスト模擬体験 ・春季休業中の共通課題（小6） ③家庭学習の充実 ・家庭学習の手引き ・家庭学習がんばり週（旬）間 (2) 学力充実向上に関する取組の進行管理 ①学力調査と分析 ②学力向上のための授業充実・授業力向上 (3) 生徒指導・教育相談に係る情報の共有と連携 ①小学校5・6年の心得、共通の生活の決まり ②情報モラル教室 ③保幼小中移行支援シート (4) モデルカリキュラムに係る推進 ①モデルカリキュラムの研修 ②モデルカリキュラムの年間指導計画への位置づけ	(1) 大宮学園教育課程の編成について ①汽水域指導プログラムの推進等について ・小中連携加配の乗り入れ授業（理科）と英語専科教員による外国語の授業を実施し、児童の実態把握や指導に効果があった。 ・人権教育加配が小学校での学習補助にあたることで、児童支援や児童の状況把握に効果があった。 ・体験入学や授業体験の実施により、入学への楽しみや期待につなげることができた。 ②Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期の学習への円滑な接続について ・保育園と小学校との連携のもと、小1プロブレムの解消に向けての取組を行うことができた。今後も保幼小接続のためのアプローチプログラムと小1スタートカリキュラムの確実な実施に向けた取組を意識する。 ・小4と中3で、夢・未来式に取り組んだ。 ・小6対象中学校定期テスト模擬体験を実施し、中学入学後のテストに係る不安解消に向けて取り組んだ。 ③家庭学習の充実について ・家庭学習の手引き、家庭学習がんばり週（旬）間により、家庭学習習慣の向上に取り組んだ。 ④人権意識の育成、「人権教育カリキュラム」活用について ・人権・生指・特活部会の提起により、大宮学園独自の「人権教育カリキュラム」の整理や周知を図るとともに、各校で進められている「人権月間」等とカリキュラムを連動させ、人権学習をはじめ様々な取組を進めることができた。 ・学びの基盤である学級の心理的安全性を高める上でも、人権教育の視点や「話し合い活動」を今後も大切にする。 (2) 学力向上に関する取組の進行管理について ①学力充実部で学力分析を行うとともに、視点を明らかにした大宮学園授業研究会を行い、授業づくりについての提起等、さらに具体化することができた。 ②教科指導の連携・接続を目指し、担任会、小中連携による指導研究に取り組んだ。担任会を通じて、「言語活用カリキュラム」を周知し「ことばの力」育成の重要性を確認できた。今後も普段の授業に位置づけ継続して指導する。 ③学園教育課程会議・学力充実部が中心となり、「主体的・対話的で深い学び」の実現による授業改善（授業づくり）、中でも、「聞くこと」「話し合うこと」等、小中学校の教員で交流した。本年度は大宮第一小学校、大宮中学校と年2回の授業研究会を実施し、「授業づくりの視点9」

		に基づく教員の活発な協議・協働が進められた。学園教育課程会議・学力充実部の丁寧な計画・運営が授業研究会の充実につながった。 ④生徒指導提要改訂に基づき、「授業づくりの視点8」に「安心安全な居場所づくり」の視点を加え「授業づくりの視点9」に改編しより求められる授業像を共有することができた。 (3) 生徒指導・教育相談の一貫・接続 ①学園として小中各校、一貫校PTAで情報モラル学習を実施し、SNSの安全な利用について学ぶことができた。 ②事例研究、保幼小中移行支援シート等の充実に取り組めた。 (4) モデルカリキュラムに係る推進について ①学園としてモデルカリキュラムをもとにした授業の実施を行った。 ②今後もモデルカリキュラムに係る研究を推進していく必要がある。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	(1) 連携・体験活動 ①人権意見発表会（学校毎） ②合唱祭・にこにこ合唱団の取組 ③体育祭（招待状） ④部活動体験（11月予定） ⑤体験授業（年2回〈6・11月〉予定） ⑥花いっぱい運動（学校毎） (2) 幼児・児童・生徒交流活動 ①児童会・生徒会交流活動 ②挨拶運動「ハイタッチモーニング」・ニコニコの日の取組 ③生徒会アドバイス ④合同避難訓練（大宮こども園・大宮中） (3) 教職員の交流と協働 ①担任会（小小担任会、小1担任と5歳児担任、小6担任と中1担任） ②授業研究に向けた取組の推進 ③合同研修会・実践交流会の実施	(1) 連携、体験活動、幼児・児童・生徒交流について ①園所、保幼小、小小、小中、園所中それぞれの連携事業が計画に沿って進められた。この間、コロナ感染防止による連携・体験活動の精選や変更を行わざるをえなかったが、体育祭活動での交流は園所と中学校で交流や挨拶運動（ハイタッチモーニング）、部活動体験等、実施できた。今後制限のない教職員・幼児児童生徒の連携事業を進められるからこそ、効果的で必然性のある連携・交流に整理し、より学園としての一体感や将来の自立につながる事業の推進を図る。 ②各小中学校でICT活用が進められている。小中学校それぞれでの活用について今後も交流し、年々変化する情報モラル教育の充実とともに児童生徒がスムーズにスキルアップできるようにしていく必要がある。 ③オンラインによる会議や活動についても環境を整え、効果的な活用を図る。 (2) 教職員の交流と協働について ①学園の教職員が確実に出会い、話し合う機会の確保を大切に、年3回の担任会をはじめ、本年度は互助組合事業や懇親会等教職員の交流と協働が進んだ。各会議や担任会のほか、大宮子ども園での保育参観、大宮第一小学校、大宮中学校での授業研究会とその後の分散会、さらに、夏季全体研修会では大宮子ども園の参観と園長による講義により、園児の姿をとおして「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」等について学び合うことができた。 ②教職員アンケートから大宮学園の教職員の信頼・協働について肯定的な評価が高く、今後も効果的計画的な研修・取組を工夫・継続する。 ③3部会での現状分析、実践交流に取り組んだ。 ④事務部会では共同学校事務室として協働が進められ、大きな成果があった。 ④担任会を年間3回計画し、ミッションをもって取り組んだ。次年度以降も実のある取組にすることが必要である。 ⑤保幼小中教員の交流は一定進んだが、勤務の関係で保育所・こども園の先生方との交流が難しい。

家庭、地域との連携、情報発信	(1) 家庭教育課題を踏まえた「大宮学園」PTA統一目標の策定 (2) 大宮学園PTA家庭教育委員会による「家庭のやくそく」の取組 (3) 大宮学園PTA統一目標に沿った校区全体及び各学校での具体的取組の計画と実施 (4) 大宮学園学校運営協議会と連動した具体的取組（見守りとセットのあいさつの取組） (5) 「大宮学園」学園評価の実施と家庭及び地域への啓発	(1) 大宮学園PTAの目標策定とともに、配布済の「令和版家庭の心得」を啓蒙することができた。 (2) 大宮学園PTA事業計画に基づき、「地域ではよう挨拶運動」や「情報モラル学習会」等、計画的に実施することができた。今後も学園PTAの取組に保育所・こども園保護者会をお誘いすることで連携を進めていく。 (3) 大宮学園学校運営協議会との協働を進め、「見守りとセットのあいさつの取組」を広く大宮地域に波及できるよう取組を進めた。特にコーディネーターが中心となり丁寧な連携が進められ、会員の皆様の思いや期待を運営に生かすことができた。地域との関係づくり、各取組への協働体制を築くことができています。 (4) 学園だより、ホームページの更新等で、各園所小中学校の取組や幼児児童生徒の姿が広く発信できた。 (5) 学園評価を実施し、今後に向けた評価をいただいた。
----------------	--	--

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
【成果】 (1) 学園教育課題、各会議・部会の推進状況を把握し、学園経営の統括、一貫した教育指導・活動を充実させることができた。また、年度当初、大宮学園教育推進計画を策定し、また各会議のミッションを明確にすることができ、限りある部会ですることが明確になった。 (2) 経営会議の方針のもと企画運営会議が運営し、教育課程会議等各会議で一致して進めるシステムが機能した。 (3) すべての教育活動で「ことばの力」「思いやる力」「つながる力」の育成に向けて取組を推進することができた。 (4) 視点を明確にした授業研究会や公開を通して、幼児から小中学校への接続やその意義、授業研究の一貫性等大きな学びがあった。 (5) 保幼小中の不登校状況である園児や児童生徒、配慮や支援の必要な子どもの状況を共通認識し、支援の在り方を探ることができた。 (6) 不登校及び不登校傾向児童生徒に絞って事例研究を進めることで不登校に陥る背景の多様さと小中学校で配慮すべきポイントについて共通理解を進めることができた。 (7) 学園の経営会議（校長）、運営会議（教頭）の両方で担当指導主事から具体的な資料を基に不登校の状況について確認する機会が設けられることで、教育支援部を中心として事例研究を通して不登校児童生徒の理解と支援につ	◎令和6年度は、大宮学園保幼小中一貫教育10年を迎え、これまでの成果・課題の整理とともに組織や各取組の検証を進め、次の10年に向けた学園の方向性を構想する1年とする。 【課題】に対して (1) 学園評価を受け、保幼小中一貫教育の3つの目的の共通理解を丁寧に行い、その共通理解に基づき、大宮学園保幼小中一貫教育の目標、教育指導の重点、教育指導・活動の充実を図る。 ①市の教育課題改善のため、保幼小中一貫教育の目的についての共通理解を当初全体会で確実に行う。 ②学びのパスポートや各種質問紙等から大宮学園の幼児児童生徒の実態や共通課題を整理する。 ③学びの基盤につながる心理的安全性や居場所のある教室、自他を尊重する心の育成を目指した「話し合い活動」の充実と園所小中学校における連続性・系統性のある人権意識向上を継続する。 ④その具現化に向け焦点化した大宮学園保幼小中一貫教育の重点策定を行う。 ア 確かな学力の育成に向けて、改定した「言語活用カリキュラム」のさらなる活用・定着を図る。 イ 人権意識の育成に向けて、「人権教育カリキュラム」を実施する。また、実施に向けた協議を大切にする。 ウ ICTの積極的活用も含めた連携・体験活動を充実させる。 エ 目指す子ども像の実現を見通した教職員の交流と協働を進める。 (2) 大宮学園保幼小中一貫教育の目標・教育指導の重点を踏まえ、一貫した教育指導・教育活動を一層充実させるための学園経営の充実を図る。 ①教職員の保幼小中一貫教育の意識のさらなる向上

いて研究を深めることができた。 (8) 校種間連携の必要性への意識が高まり、大宮中学校の小学校在籍時の欠席状況の情報提供（未然防止の観点）及び不登校傾向となった生徒に絞った小学校在籍時の学習の状況や欠席状況の情報提供（早期対応の観点）が進んだ。 (9) 大宮学園学校運営協議会では、「あいさつ」を中心に実行ある取組が進められた。（見守りとセットのあいさつの取組） (10) 小中連携事業の他、小小連携、幼保連携も可能なことを実施でき、継続した取組にできた。 【課題】 (1) 学園評価を受け、保幼小中一貫教育の3つの目的の共通理解を丁寧に行い、その共通理解に基づき、大宮学園保幼小中一貫教育の目標、教育指導の重点、教育指導・活動の充実を図る。 (2) 大宮学園保幼小中一貫教育の目標・教育指導の重点を踏まえ、一貫した教育指導・教育活動を一層充実させるための学園経営の充実を図る。 (3) 各校で不登校への対応を進めているが、結果として小中学校で学校に来にくくなる子が毎年出ている。不登校・特別支援教育・就学指導に係る学園課題に対して、さらに実践研究を積み重ねる。 (4) 教育支援が必要な幼児・児童生徒や、特別支援及び教育相談における校種間連携の仕組みを整え、校種間の円滑な接続を推進する。 (5) 大宮学園学校運営協議会（学園コミュニティ・スクール）との協働をさらに進め、より地域とともにある学園（学校）を目指すとともに、地域に根差していくための工夫を考える。 (6) 各会議・部会等、継続して開催できるものは幼児児童生徒の継続した指導について協議、取組でき、大きな成果につながっているが、担任会等回数が限られており、指導の継続性も含めて難しく検討が必要である。	と、学園としての指導の一貫性への更なるステップアップを図る。特に保幼からの接続について継続して意識を高める取組を進める。（他市町からの転入者や新規採用者等の増加に伴い丁寧な説明を行う必要がある。） ②各校持ち回りに授業研究会を開催し、本学園の重点内容を進めることで、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指していく。授業研究会を通して、普段の授業で大切にすることを学園全体で確認し、幼児児童生徒の変容につながる継続した指導を行う。 ③これまでの「ことばの力の育成」「人権教育の推進」の視点を踏まえ、「探究的な学び」や「ICTの効果的な活用」「自己調整力の向上」等、これからの教育課題への連動を図る。 ④年3回の全体会、夏季研修会や授業研究会等、今後も持続可能な研修・交流を計画する。 ⑤担任会・教科部会等を効果的・効率的に進める。 ⑥幼児児童生徒の交流や各園所小中学校の行事・取組等について、学園としての実施時期や内容等の検討・調整を丁寧に進める。 (3) 各校で不登校への対応を進めているが、結果として小中学校で学校に来にくくなる子が毎年出ている。不登校・特別支援教育・就学指導に係る学園課題に対して、さらに実践研究を積み重ねる。 ①児童生徒の円滑な接続のための個別記録の活用及び不登校・不登校傾向児童生徒に特化した事例研究を継続して行う。 ②教育相談、不登校、家庭支援に係る情報交流と指導の在り方について継続して研究を進める。 (4) 教育支援が必要な幼児・児童生徒や、特別支援及び教育相談における校種間連携の仕組みを整え、校種間の円滑な接続を推進する。 ①保幼小連携事業・保幼中連携事業・小小連携事業・小中連携事業を通じた担任会の充実を図る。 ②幼児の具体的な姿から「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を教職員で共有し、保幼小の丁寧な接続を継続する。 (5) 大宮学園学校運営協議会（学園コミュニティ・スクール）との協働をさらに進め、より地域とともにある学園（学校）を目指すとともに、地域に根差していくための工夫を考える。 ①大宮学園学校運営協議会の来年度の方向性を踏まえ、来年度当初の協議会で具体的な提案を行い、活動を通してより地域とともにある学園（学校）を目指す。 ②PTA・保護者会の事業の一体化について今後も無理なく進める。 (6) 各会議・部会等、継続して開催できるものは幼児児童生徒の継続した指導について協議、取組でき、大きな成果につながっているが、担任会等回数が限られており、指導の継続性も含めて難しく検討が必要である。
--	--

令和5年度 網野学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」、教育目標

【目指す子ども像】	
あ：明るく元気に進んで学ぶ子	【知】意欲的に学習に取り組む子ども
み：みんななかよく支え合う子	【徳】規範意識をもち、仲間と支え合う子ども
の：のびのび生き生きやりぬく子	【体】粘り強く心身を鍛え、やり抜く子ども
【教育目標】	
将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす子どもの育成を図る教育の推進	

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

(1) 確かな学力の育成		
ア 主体的に学ぶ力とコミュニケーション能力の育成		
(ア) 生徒指導の4機能を生かした「わかる」「できる」授業の実現		
(イ) 指導と評価の充実(指導と評価の一体化)		
(ウ) ICTの活用による授業改善		
(エ) 「網野学園で育成したい非認知能力」の検討・改訂		
イ 補充学習の充実		
(ア) 基礎基本を定着させるための個別補充学習		
ウ 家庭学習の充実		
(ア) 授業とつながる自主的な家庭学習の実現		
(イ) 家庭と連携した学習習慣の定着の取組		
(ウ) 家庭学習の指標づくり		
(2) 規範意識の醸成		
ア 学習規律の確立		
イ 生活習慣の確立		
(3) 豊かな人間性の育成		
ア 自尊感情の醸成		
イ コミュニケーション能力の育成		
ウ 将来を展望する力の育成		

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	ア 学園内の全ての学校園所が、教育目標、目指す子ども像の共通化 イ 学園内の全ての学校園所が、学園経営方針・目指す子ども像の経営方針へ位置付け ウ 学園内の全ての学校園所が、第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業の各学校・園所の経営方針へ位置づけ	○随時事務局会議を行い、経営会議の進行管理を行うことができた。 ○学園経営の基本方針に基づいた「重点的な取り組み内容」「行動連携」を具現化するために、経営会議で確認したことを、各会議・部会等で年間計画に沿って取り組み、目指す子ども像の実現に向けて実践を積み上げることができた。 ○全体研修会や授業研究会を計画通りに行い、第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業の研究実践を各会議や部会と連携し組織的に進めることができた。 ○学園評価アンケートを実施・分析を行い、次年度の計画の改善に活かすことができた。 ○「網野学園保幼小中一貫教育だより」「網野学園保幼小中一貫教職員だより」「網野学園学校運営協議会だより」や学力充実部のたより等を通して、各学校園所・各部会・学校運営協議会の取組を共有することができた。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	ア 不登校の解消に向けて ・第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業と連動した取組 ・全ての子どもにとって居場所となる魅力ある学校づくり	○第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業に取り組む中で、「非認知能力」について研究を進め、「網野学園で育成したい非認知能力（指標）」に基づいて、ギミックブラッシュアップシートを活用した授業や保育・教育を学園、各校園所で進めることができた。 ○研究推進に係り、京都教育大学 田爪教授から指

	・早期発見、早期対応、適切な対応 ・社会的自立を目指した取組 ・組織的な取組（ICT の活用、関係機関との連携、保護者の心の安定） イ 0 期、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期の指導目標を踏まえた系統的な指導 ・「網野学園で育成したい非認知能力」の検討・改訂 ・学力向上システムプログラムの見直しと活用 ・学力充実月間 ・家庭学習の手引きの活用・家庭学習がんばり週間の取組 ・6 年生中学校授業体験と 6 年生部活動体験 ・6 年生単元総括テスト ・6 年生学年末テスト・6 年生春季休業中の課題の見直し・実施 ・中 1 学習補習・小 4 ふりかえり学習 ・京丹後市保幼小中一貫教育モデルカリキュラムの積極的な活用 イ 落ち着いた環境をつくるための規範意識の醸成 ・学園で目指す「これだけは！」の取組 ・生徒指導・教育相談に係る情報共有 ・乗り入れ授業、小小連携授業、小中連携授業 ・アプローチプログラム・スタートカリキュラムの実践・検証 ・長期モデルプランアプローチプログラム・スタートカリキュラムの実践・検証 ウ 思いやりをもち仲間と共に生きる人間関係づくり ・生徒指導の 4 機能を生かした教育活動 ・アルミ缶回収・ボランティア活動 ・あいさつ運動 ・Ⅰ期・Ⅲ期の区切りとなる取組（1/2 成人式、立志式）	導助言をお世話になった。田爪教授からは、「学園におけるギミックの取組は、教育・保育実践の中で幼児・児童・生徒の認知能力及び非認知能力、学びに向かう力をどのように見取り、その能力を伸ばそうとするのが具現化されたものであった。実践の成果を評価する上でも有効である。学びに関わる認知能力や非認知能力を連続的、系統的に捉える機会となった。ギミックという共通する言葉で考えるということは、学園全体の組織的な取組として有効である。」と評価していただいた。 ○小学校から中学校への円滑な接続を目指し、「6 年生中学校部活動体験」「6 年生中学校授業体験」を行った。今年度も部活動体験を 6 月に実施し、中学校 3 年生が中心となった活動を体験することができたことで、部活動への不安解消と期待、部活動選択の一助に繋げることができた。また、中学校授業体験はもとより、日々の小中連携加配教員(算数科)や教科担任制(英語科)教員による授業を小学 5・6 年対象に行ったことで、不安を軽減し中学校への憧れを抱くと同時に学習に向かう力の高まりにつながった。 ○篠原嘉一氏（NIT 情報技術推進ネットワーク）を講師として今年度もゲーム・ネット講座を小学生と中学生を対象に行うことができた。今年度は、小学 4 年生とともに小学 2 年生も参加対象学年に加えて網野北小学校で実施した。また、中学生は、自分のスマホを持参可とし、自分を守るため、他の人を傷つけないための SNS の扱いについて学びを今年度も深めることができた。 ○「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を保幼小連携部で共有・取組を進めた。また、網野学園各園所の実態に合わせてカリキュラムの編成を見直すことができた。 ○今年度、保幼小連携部を中心に令和 6 年度版長期モデルプランを作成することができた。 ○小中合同アルミ缶回収ボランティアに取り組むことで、子どもたちは網野学園の一員であることを意識することができた。また、中学生が小学校に出向き一緒に活動することで、児童にとっては、中学生が自信をもって思いを表現し伝える姿に憧れをもち、目指す姿を学ぶ機会になった。中学生にとっては、小学生が一生懸命に取り組む姿を見て、アルミ缶回収に取り組む意義を考える機会となった。 ○不登校傾向及び不登校児童生徒について経営会議や運営会議で状況を共有するとともに、教育相談部会を中心に事例研究会を行い、具体的な対応について協議することができた。また、園所から小学校へ、小学校から中学校への引継ぎシートで確実に情報を引き継ぎ、スムーズな接続ができるようにしている。今後も、10 年間を見通して、学校・園所が家庭との連携を進めながら、一人一人の幼児児童生徒が、学校園所に適応できる力を身に付けていけるようにしていく。
--	--	--

幼児児童生徒、教職員の交流と協働	ア 目指す子ども像の実現に向けた教職員の協働及び教職員の交流 (7) 教職員の合同研修会 (イ) 授業研究会、園所参観を通じた研修 (ウ) 学年部会を通じた研修 イ 「自尊感情」と「コミュニケーション能力」の向上を目的とした交流事業 (7) 6年生網野中学校合唱祭（練習見学）参加 (イ) 6年生体育祭取組見学 (ウ) 6年生部活動体験 (エ) 合同校外学習及び学びの交流 (オ) 小中合同交流事業（ともだち交流会等） (カ) 小学校体験授業時の1年生との交流 (キ) 5歳児交流会	○年間3回の全体研修会を通して非認知能力についての理解を深め、共通認識を図ることができた。保育研究会と授業研究会（2回）実施し、園所の先生方も一緒に事後研究会を行い協議することができた。 ○推進会議が中心となり、「ギミックブラッシュアップシート」を基に、授業改善を各校で進めることができた。 ○「未来を拓く学校づくり」推進事業に係り、招聘した講師による講演や研修会へ参加するなど、連携した学びの場を設定することができた。 ○保幼小連携部には校長、教頭それぞれ1名が入り円滑な連携を進めることができた。 ○生徒指導部会、教育相談部会、養護部会を必要に応じて開催し、児童生徒の実態等の共有を図ることができた。 ○6年生中学校授業体験は、各小学校の児童をグループにして活動させたことで、個々の児童が交流する機会となり、中学校入学後のイメージをより具体的に持つとともに、同学年の仲間を知ることができ不安軽減につながった。 ○5歳児交流会を実施することで、園所間の交流及び友達を知ることができ、次の体験入学につながった。
家庭、地域との連携、情報発信	ア 網野学園学校運営協議会の取組 (7) 網野学園の教育や子育て環境について学校・家庭・地域が目標や課題を共有・協議し、具体的な取組を推進して学園の教育環境づくりを進める。 (イ) 網野学園保幼小中一貫教育の推進に向け、学校（PTA）園所（保護者会）、家庭、地域が連携・協働して取り組む。 イ 京丹後市PTA協議会網野小中一貫校PTA、保護者会の取組 (7) 網野小中一貫校PTAとして、「学園合同あいさつ運動等、一体となって取り組む。また、学園の「目指す子ども像」の実現に向け、保護者会とも連携して取り組む。 (イ) どの家庭でも、幼児から大切に「これだけは！」（家庭編）の取組 ・基本的生活習慣の確立 ・規範意識の基礎の確立 ・家庭学習の習慣化 (ウ) 「子育て講演会（ゲーム・ネット講座）」については、主催を網野学園とし、運営は運営会議が行う。また、PTA及び保護者会とも連携し進める。	○網野学園学校運営協議会を計画的に実施し、学校・家庭・地域が一体となった必要な教育支援について意見交流し、学園支援への参画意識の高揚につながった。 ○学期に一度、網野学園あいさつ運動を保護者だけでなく関係団体や地域の方々と協力し、全ての学校で実施することができた。 ○どの家庭でも幼児から大切にする「網野学園『これだけは！』（家庭編）」のリーフレットを保護者に配布し、保護者へ保幼小中一貫教育で大切にしたい視点をお伝えし、協力していただくことができた。 ○保幼小中一貫教育学園コーディネーターが中心となり、学園だより、ホームページ、リーフレット等を通して、学園の教育活動を保護者・地域に積極的に広報することができた。 ○学校支援ボランティア等を活用し、網野町の住民が教育活動に積極的に参加できる取組を進めることができた。 ○第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業に伴い、京都ノートルダム女子大学高井教授からいただいた「ようこそ！えほんのせかいへ」を通して、幼児期からの読み聞かせの大切さを保護者に知らせることができた。 ○子育て講演会に篠原嘉一氏（NIT 情報技術推進ネットワーク）の講演を通じて、保護者がSNS等について学べたことは、家庭での生活習慣の確立を図る上で有効であった。来年度も継続してSNSに係る最新の学習会を実施する。

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
(1) 組織体制及び運営上の改善 ○随時事務局会議を開催することで円滑な経営会議の進行管理を行うことができた。 ○運営会議を定期開催し、学園内の教育課題を共有し、教育目標・目指す子ども像の実現に向けた経営を行うことができた。 ○学園経営の基本方針に基づいた「重点的な取組み内容」「行動連携」を具現化するために、経営会議が中心となり、各会議・部会等で組織的に進めることができた。 ○運営会議、推進会議、領域部会の取組の進捗状況を把握し、成果・課題を整理し、総合調整や改善に努めた。 △事務局は、継続して学園経営の円滑な進行管理に努める。 △最終年となる「未来を拓く学校づくり」推進事業の研究実践をまとめ、広く発信していく。 △「認知能力」と「非認知能力」を一体的に育む教育を今後の学園の教育活動の柱にして取組を推進していく。 (2) 重点的な課題・取組について <u>教育目標・目指す子ども像・学校経営方針について</u> ○教育目標及び目指す子ども像の実現に向けてPDCA サイクルで学園経営を行うことができた。 ○園所で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見通した実践研究を意欲的に進め	(1) 組織体制及び運営上の改善 ○「未来を拓く学校づくり」推進事業を通して、「認知能力」と「非認知能力」を一体的に育むための学園実践を積み重ね最終年をまとめる。 ○経営会議は、第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業を経営の柱とし、今後も学園内の教育課題、各会議・部会等の動きを把握しながら的確な学園経営を行う。また、各会議・部会担当校長・教頭は、経営会議に連絡報告及び決裁を受けながら、実践の方向性・到達点を明らかにし、取組を進める。 ○次年度も保幼小中一貫教育学園コーディネーターが、各学校園所への訪問、各会議・部会への参加を行い、状況把握と内容整理、調整を図る。 ○「網野学園で育成したい非認知能力(指標)」を基に、授業や保育・教育の研究を深め、実践を積み上げる。 ○児童生徒の生活習慣や SNS との関連性の改善に向けてアンケートの分析を行い、各校園所の実態に合わせた取組の実施と交流を行い、学園の子どもの生活改善を図る。 ○保幼小連携部会の担当者が同一校にならないよう調整し体制を組む。 ○令和6年度、第1回研修会(5月2日)第2回研修会(8月8日)第3回研修会(2月18日)の年3回の研修会を節目として研究を深める。 ○第2回全体研修会(夏季)については、網野学園小中学校全教職員で3園所参観・事後研を行い、幼児の実態把握や指導実践について共有化を図る。また、網野学園教職員が学べる場として講師を招聘し研修を深めていく。 ○令和6年度については、授業研究を2学期に網野こども園・島津小学校・網野中学校で行い、京丹後市保幼小中一貫教育授業研究会と兼ねて実施し、第2期「未来を拓く学校づくり」の研究成果を、授業研を通して整理し、発信していく ○学年部会については、年4回実施する。(5月・6月・7月・1月)授業日における開始時刻は午後4時からとするが7月は午後3時からの設定とする。各小学校の授業公開と関連させたり、計画に沿った十分な準備をする等見通しをもったりして運営し、限られた時間の中で学年部会の研修の充実を図る。 ○小5、小6学年部については担任と中学校数学、英語担当教員で構成する。(5年部会…中学校英語科担当教員・小学校理科専科、6年部会…中学校数学科担当教員) ○学年の課題から必要に応じて学年部会を開催できるものとする。領域部会についても、必要に応じて開催する。 (2) 令和6年度に向けての重点的な課題・取組の方向 <u>教育目標・目指す子ども像・学校経営方針について</u> ○教育目標「将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす子どもの育成を図る教育の推進」及び目指す子ども像の実現に向けて、PDCA サイクルで学園経営を行う。

た。また、保育参観が実施でき、事後研を通して研修を深めることができた。 ○中学校卒業までの目指す姿の共有と系統的な教育、一貫した指導の継続を行うため、「網野学園で育成したい非認知能力（指標）」を活用した授業研究会が計画通り実施できた。 ○第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業に係る2年次の研究実践を進めることができた。 確かな学力の育成について ○小学6年生においては、思考力・判断力・表現力を付けるために、単元終了時に学習内容の理解度・定着度の検証や把握をするため、単元総括テストを作成し、実施することができた。 ○推進会議を中心に授業研究会を年2回実施し、「網野学園で育成したい非認知能力（指標）」を基にした授業研究を進めることができた。 △さらに、「網野学園で育成したい非認知能力（指標）」を基に、学園として授業研究を進めていく。 △「確かな学力の育成」については、網野学園の最重要課題であるため、授業づくりを中心に研究を進めてきた。児童生徒アンケート結果から学習意欲、学習内容の理解については肯定的な評価（90%）が高い。しかし、自分の考えをもち交流することは学校間・学年間に差が見られる。また、家庭学習の充実の課題は大きく、小中の接続をより丁寧に指導し、学習時間はもとより自ら学習する力を育成する必要がある。 △今年度の学園児童生徒アンケートの分析から、課題を明確にし、学園としての手だて、指導の方向性を明確にし、具体的な取組を進める。 規範意識の醸成について ○「規範意識の醸成」については、児童生徒及び教職員アンケート結果や児童生徒の状況から中学校においてはほぼ定着（99%）してきている。小学校では、学校間、学年間に差が見られ更に定着させるための取組が必要である。	○各期で育てたい非認知能力を明確に持ちながら、教育活動を進める。 ○園所で「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見通した実践研究を意欲的に進めていく。 ○第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業最終年の研究実践に取り組み、まとめを広く発信していく。 確かな学力の育成について ○主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業デザイン、ゴールの姿をイメージした単元全体を通した授業づくりについて、研究・実践を推進会議が中心となり進める。また、授業づくりの研究とともに指導と評価の一体化について研修を深め、授業改善を進める。 ○育成したい非認知能力（指標）を基に授業改善を進め、確かな学力の育成を目指す。更には、非認知能力を伸ばすことが認知能力を伸ばすことにつながることから「学びに向かう力、人間性の涵養」の観点から「自分と向き合う力」、「自分を高める力」、「他者とつながる力」の育成に視点をおいた授業実践を行う。 ○ICTを活用し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める。 ○単元全体を構想することで、授業のゴールの姿を明確にし、子どもが主体となる授業づくりと指導と評価の一体について実践を進める。 ○確かな学力を身に付けさせるため、推進会議が中心となり、各校の実態や状況を交流し授業改善に活かす。また、各種テストの分析を丁寧に行い、課題に対して各校の実態に応じた手立てを講じる。 ○学園として、家庭学習・基礎学力の定着に取り組む。特に家庭学習については保護者とも連携し、家庭学習習慣の定着・内容の充実（自主的な学習）を目指した取組をさらに進めていく。 ○小学6年生においては、思考力・判断力・表現力を付けるために、単元終了時に学習内容の理解度・定着度の検証や把握をするため、引き続き単元総括テストを作成し、実施する。 ○小学4年生においては、I期の最終学年であり、基礎基本の定着に向けた小4ふりかえり学習を継続して実施する。 ○家庭学習の充実が大きな課題となることを共通認識し、学校と家庭が連携し、家庭学習の環境づくりを進めていく。iPadやオンラインによる学習を授業や家庭学習での有効な活用について今後も検討していく。 ○保育参観での学びを自らの実践に生かす姿勢と具体的な実践を積み上げていく意識を高めていく。 規範意識の醸成について ○改訂した網野学園「これだけは！」について、学園、各校・園所で非認知能力の育成に向けて組織的に進める。 ○篠原嘉一氏による「ゲーム・ネット講座」については、小2年生、小学4年生、中学生、網野学園保護者を対象に経営会議、運営会議が主体となっ
--	---

△行動連携『どの家庭でも、幼児から大切に
する「これだけは！！」(家庭編)』の中の、
規範意識の基礎の確立の中で、「テレビ・ゲ
ーム・インターネット・SNSなどのルールを
決める」を挙げている。しかし、網野学園
生徒指導部のアンケート結果からも、大き
な課題になっている。

豊かな人間性について

- 不登校傾向児童生徒について毎月あげると
ともに、経営会議、運営会議等で確認し実
態交流を行った。
- 引継ぎシートを丁寧に作成し、園所小間、
小中間の接続を丁寧に行うことで不登校の
解消につなげている。
- 教育相談部会で事例研修会を実施し、不登
校児童生徒の事例をもとに児童生徒とのつ
ながりや家庭支援の手法等を学ぶことがで
きた。また、SCやSSWの専門機関と連携を
図り、状況改善に向けての取組を進めるこ
とができた。
- △「豊かな人間性」については、アンケート結果
から学年が上がるにつれ、自己肯定感や自尊
感情にかかわる項目が低くなっている。
- △学園評価アンケートから「自己肯定感」や「将
来の夢や目標」をもつ児童生徒の割合が学年
が上がるにつれ、減少する傾向にある。

保幼小中一貫教育の具体的な内容

- 網野学園Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期のゴールの姿を各
学年部会で実態交流するとともに、保育部会・
学年部会の中で育てたい非認知能力(指標)
について研究を進めることができた。
- 継続して感染症対策をしながらではあった
が、工夫をしながら多くの事業や行事を実
施することができた。
- 保幼小中一貫教育学園コーディネーター
が、各会議、各部会等に参加し経営会議で
の方向性等について把握し、整理したり調
整したりしながら、目的に沿った連携や取
組を進めることができた。各園所・小学校
を訪問し、各校の授業や取組をたより等で
発信し、学園内の各園所小中学校間をつな
ぐことができた。
- 保幼小中一貫教育学園コーディネーターが
網野学園運営協議会の事務局を務め、地域
学校協働本部地域コーディネーターと共
に、丁寧な連携を進める中で、保護者・地
域の方々の学園運営への参画意識の高揚に
つながった。

て実施する。(小学生は北小、中学生・保護者は網
中を会場とする)保護者の部(子育て講演会)に
ついては、主催は網野学園とし、運営は運営会議
が行う。また、PTA及び保護者会とも連携し、特
に、園所の保護者への参加も進める。

- ゲームやSNSの扱いについて、自己コントロール
を身に付け、正しく使う力をつけるために、学園
児童生徒アンケートの分析から生徒指導部会と養
護部会が連携しながら取組を進める。

豊かな人間性について

- 自己肯定感をもち将来を展望できる力を育むこと
ができるよう、より一層豊かな人間性を育む学習
や活動を取り組んでいく。
- 多様で複雑な不登校の要因や背景をできる限りの
確に把握し、切れ目のない組織的な支援をしてい
く。重点的な取組み内容の中の「豊かな人間性の
育成」に位置付け、「自立的に生きる基礎の確立」
に向けて、家庭と連携し系統的に取組を進める。
- 情報共有を丁寧に行い、不登校の未然防止、早期
解消、居場所づくりに向けて取組を進める。各ケ
ース会議、各関係諸機関との連携を強化する。
- 育成したい非認知能力(指標)を基に、学園の教
育活動及び各園所・学校での教育活動を通して育
んでいく。

保幼小中一貫教育の具体的な内容

- 確かな学力の育成に向けた具体的な取組として次
の2点を行う。
 - ① 小中連携加配を活用し、6学年部会で単元
総括テストを作成し、実施する。
 - ② 各学年で作成した「網野学園で育成したい
非認知能力(指標)」を基にし、ギミックブ
ラッシュアップシートを活用した授業改
善を進める。
- 部活動体験は中学3年生が活動している6月に実
施する。また、6年生対象入学説明会・中学校授
業体験は11月に実施する。
- 5歳児が一堂に会し、他の園所の仲間と交流を深
めるため、5歳児交流会を実施する。
- 各園所は近隣の小学校行事等の見学を通して、子
どもたちが小学校施設への出入りや行事を知る機
会を設定する。
- 学園の課題である「基本的生活習慣の確立」「規範
意識の基礎の確立」「家庭学習の習慣化」について
網野学園小中一貫校PTAとして、園所保護者会と
も連携し課題解決に向けて取組を進める。
- 就学前から中学校卒業までを見通した家庭との連
携を進める上で、園所保護者会との連携を進める。
- 網野学園学校運営協議会での交流・協議を通して、
さらに学校・家庭・地域が参画意識を高め、一体
となって教育力のある学校・学園づくりを目指す。

令和5年度 丹後学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」、教育目標

- ①ことばで伝え合い、主体的に学ぶ子 【知】
 ②自分を大切にし、人を思いやれる子 【徳】
 ③ねばり強く身体をきたえる子 【体】
 教育目標「夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

- ①幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿についての研究・実践や各教科の目指す資質・能力のために生徒指導の実践上の4視点を授業にどのように活かすかを研究する。授業研究の教科として児童生徒の実態、課題克服の必要性があるため『国語』を重点とし、文章を正しく読み取り、じっくり考え、適切な表現ができることをめざす。
 ②保育所・こども園・学校間が連携して、就学前から中学校卒業までを通して適時性・一貫性・連続性のある教育課程を編成し、小中合同事業・保幼小接続に係わる事業・小小連携合同事業と3つの事業の充実を目指す。
 ③丹後学園の取組や事業等を積極的に発信することで保護者や地域の方の理解を一層深める。

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	①各期の指導のポイントを設定し、子どもの交流を図る行事等の実施を通して、「集団生活の中で人と関わる力」や「コミュニケーション能力」を高める。 ②重点教科を「国語」とし、各期別言語活動「読むこと」の指導の重点的なポイントを意識して授業改善を行い、他教科・領域の指導についても同様にポイントを読み替えて実践を積み。授業改善の10のチェックリストの活用。 ③全体研修会、授業を通した研修会（3回）、学年部会を通した研修を計画的に実施し、目指す子ども像の実現、目指す教師像の意識化に努める。	○教育目標、目指す子ども像を保幼小中で確認し、子どもたちの成長と発達の特長や課題を共有して適切な指導を継続してきた。また、指導については一貫性や連続性を意識した実践ができた。 ○経営会議を定例化し、運営会議・教育課程会議と学力充実部会・教育相談部会・生徒指導部会・保幼小接続部会の取組の進捗や実践後の成果・課題を交流し、今後の方向性を示し取組を進めることができた。 ○事務局会議を経営会議の前に実施し、各会議、部会等の実践状況や学園内の教育課題を把握し、教育目標の達成に向け経営会議等の調整・事務作業を行った。 ○学園経営方針に基づき、運営上の課題の検討や調整を行い、各校での年度初・末全体研修会、夏季研、教育講演会を充実させるために事前準備、事務作業等を進めた。 ○経営会議・運営会議後は、会議内容についてコーディネーターがまとめ、各校・園・所に発信した。 ○一斉部会、一斉学年会を開催し、指導課題、合同事業、教材研究などの交流の時間を設定できた。 ○新型コロナウイルスが5類に移行したこともあり、経営方針や計画について、ほぼ予定どおりに進めることができた。また、丹後学園学校運営協議会の委員の方々には、挨拶運動や授業や体験活動等の参観をとおして、小中の連携や子どもたちの実態を見ていただく機会となった。 ○中学校からの課題提起を受け、学園全体で課題を共有し、課題解決に向けた動きや取組を各部で進める上で意識を高めることができた。 ○学園評価アンケートの分析により、地域・保護者・児童生徒の保幼小中一貫教育に対する認識や要望等について知ると共に、丹後学園保幼小中一貫教育についての改善の手がかりを得ることができた。アンケートについては、Formsを活用して、集計の効率化を図った。

		○各学校等で課題に応じた教育実践を行い、全ての学校等が中学校を卒業する姿を想定し、生きる力の育成につながる指導ができた。（自立につながる意図的な指導） ●保幼小中の10年間を見通した、保幼小中一貫教育の深化を図るためにも校種間における連携を含めた総合調整活動（公開授業、授業改善への環境づくり）を各種事業との連携のもと、今後も進めていく必要がある。 ●一斉学年部会で、ICT活用に関して、各期に応じてより効果的に使用する単元等を見極めておく必要がある。 ●次年度さらに保幼小中一貫教育を推進していくため、0期からⅢ期の各段階でつけるべき力の実践や研究を深めていくことが必要である。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	①就学前から中学校までの一貫した「教科の指導と生徒指導の一体化させた授業づくり」を進めるとともに、コミュニケーション能力の育成に努める。 ②指導方法の適時性や系統性・一貫性を重視するために、言語活動「読むこと」を重点として国語を研究し、指導の方向を2小学校でそろえる。 ③総合的な学習の時間を活用した「丹後学」を教育課程に位置づけ、実践研究を進める。	○国語を小中学校がともに重点に置き、授業の公開や授業研究会が実施できた。授業研究会では、宇川小学校では、特に安心できる学習環境が整えられた中で、工夫を凝らした心を揺さぶる発問により、子どもたちの熟考している姿が見られ、日々の丁寧な指導が窺われた。丹後小学校でも授業の中で、自分で決めたり考えたりする場面を設定し、深く考えたいような発問や問い返しを行い、主体的・対話的な学習に向かう機運が高まっているとともに、既習事項や学園、学校の教育方針を学級経営に落とし込んだ“かしこくなるための6か条”を子どもたちに意識させ、互いを認め合う姿が見られたときは、積極的に評価していく学級の温かい風土が醸成されていた。丹後中学校でも授業公開を参観する中で、生徒の様子を知ることができた。 ○「授業研究会通信」を発行し、授業研究会での学びを各校園所での保育・授業実践に生かすことができた。特に、学校園所において「対話的な学び」を充実させることができた。 ○小4～中3までの学力・学習状況（の変容）を把握できる「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」の結果（質問紙調査）の分析を行い、児童生徒の非認知能力の状況について把握することができた。「学習するときに、ICT端末を使うことで、ほかの人と意見や考えを共有しやすい。」「学校では安心して学習することができている。」という項目において、小4～中3までのすべての学年において、肯定的回答の割合が京都府を上回っていた。このことから、学園としてICTの積極的・効果的な活用が進んでいることや生徒指導の実践上の視点の一つである安全・安心な「居場所づくり」に配慮した授業づくりが進んでいることがうかがえる。（※結果（質問紙調査）については、各校で共有した。） ○小学校では、タイピングスキルの向上を目指すことで、授業や委員会等での振り返り・交流等がスムーズに行えるようになった。3学期に「タイピング検定」の取組を行うことを計画している。 ○オンラインによるタブレットの持ち帰り学習を積極的に推進することができた。（小中学校ともに、持ち帰りはいつでも可とし、児童生徒に選択させている。） ○家庭学習ががんばり週間の取組では、1学期の振り返りを踏まえ、2学期は取組期間を短くして取り組んだ。そうすることで、各校の実態に応じて、焦点化して取り組むことができた。 ○各校で「生活のきまり」を使って、学校生活のルールやマナーについて指導した。また、ipadの使い方については、各種ルール（操作、授業、持ち帰りなど）、情報モラル（画像や動画について、個人情報についてなど）、マナ

		一について指導した。 ○不登校や不登校傾向、教育相談課題のある児童生徒の交流をすることで、丹後学園として情報共有ができた。実態交流だけでなく、家庭環境などの背景や要因、支援のあり方なども探ることができた。 ○中学校入学後の様子を交流することによって、小学校は支援の在り方等を検証し、教育相談活動に活かすことができた。 ○スクールカウンセラーから専門的な知識を学び、児童生徒の見立てについて学ぶことができた。【7月14日「ABA（応用行動分析学）」について】 ○2学期末に、6年生の授業参観と懇談をもつことによって、小中の連携の円滑な接続が組織として積極的にできた。 ○中学校においては、11月後半、12月頭に参観懇談をすることで、余裕をもって各学校の児童の雰囲気、児童の実態や課題などを把握することができ入学後の見通しがもてた。 ○小学校在籍中15日以上欠席があるなど気になる児童の個別記録を中学校に持ち上がり、実態や指導・支援のあり方等を円滑に中学校に接続する予定である。(3月末) ●別室登校している児童生徒への支援の充実をさらに考えていきたい。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	①2小学校が集合して実施する事業と各校で共通して実施する事業を行う。 【2小学校合同事業】 ②教職員全体研修会・授業研究会を実施するとともに、保幼小接続部会や期別部会・学年部会を開催し、それぞれの課題の改善や解決に向けた取組を実践する。 ③中学校1年生入学後1カ月ごろの状況及び出口となる中学校3年生の授業公開を行い、多様な視点で課題共有すると同時に指導について研究協議を行う。【小中合同事業】 ④教職員間…学年部会での授業研究会 保幼小接続部会でのスタート研修会【保幼小接続に係わる事業】 ⑤保幼小の子ども…5歳児と小1年生との交流会(2回)、遊びと給食交流 保幼小の教職員…5歳児と小1担任の夏季研修会、テーマは「話す・聞く」 ⑥保幼連携…4.5歳児の交流活動	○年度当初に1年生の授業参観を実施し、新入生の様子について保育園で共有する事ができた。また、スタート研修会と同日に設定することで、子どもたちの姿をもとによりよい接続の在り方について協議することができた。 ○スタートカリキュラムの検証を通して、どのような部分の接続が必要なのかということやかかわり方の接続についてなど、具体的な接続の在り方について考えることができた。 ○接続部会夏季研修会では、幼児期の教育の基本的な考え方や保育園の接続の在り方について専門的な見地から学ぶことができた。また、幼児の姿をもとに育ちにおいてどのようなことを大切にしかかわっていくのかということを考える機会となった。 ○本年度の夏季全体研修会では、学校や家庭での非認知能力の育て方など講演された内容を教職員全員で確認できた。また、講演後は分散会をもち、今までの実践を振り返ったり、今後の指導構想などを交流することができた。 ○夏季全体研修会では、非認知能力を伸ばすことの重要性や教育現場で伸ばすためにできることについて教職員全体で確認できた。 ○「中学校授業体験」「小学校合同校外学習」「丹後こども園・宇川保育所合同での1年生と5歳児のなかよし交流」等、効果的に進めることができた。また、昨年度は「部活動見学」であったが、今年度は「部活動体験」として実施でき、より充実した取組となった。 ○小小合同行事、小6部活動体験、小6授業体験、ふれあい交流会等は中学校生活への不安を解消する機会になった。 ○なかよし交流会においては、実施時期や目的等を踏まえ、宇川保育所・丹後こども園・宇川小学校・丹後小学校の交流の広がりや深まりに焦点化することで、取組の充実を図ることができた。 ○少しずつではあるが、可能な範囲での日常的な交流を増やしていくことができている。(オンライン、事前交流等)

		●保幼小の交流を計画的に行えるよう、各校園所の活動の中で関わり合える場面があるか一定整理していけるとよい。 ●なかよし交流会については現日程でも行うことは可能であるが、各校園所での行事等を踏まえると10月中旬あたりに変更していくことが望ましい。 ●育てたい力が、ついたかどうかを検証し、それに対しての改善策を検討していく必要がある。
家庭、地域との連携、情報発信	①「丹後学園学校運営協議会」の機能化と充実を図る。(年間2回の総会) ②「丹後学園だより」等を発行し、保護者や地域に配付する。各校のホームページにて、取組の状況を発信するように計画する。	○予定していた年間計画は、ほぼ計画通り実施できた。 ○小中一貫校PTAと市教育委員会とともに教育講演会を開催し、家庭や地域での非認知能力の育て方等を保護者、地域住民と学ぶことができた。 ○学校と家庭、地域社会の横の連携を深めるために丹後学園学校運営協議会委員、町内民生児童委員、主任児童委員、保護司、各種団体の方々に保幼小中一貫教育の支援、協力、理解を得ることができた。 ○各校ホームページや学園だより等で、教職員や児童生徒、保護者に広く広報することができた。 ●保幼小中一貫教育の成果として顕われた子どもたちの成長を広く発信し、地域住民へ学園のめざすところがさらに浸透するように取組を継続させていく必要がある。 ※次年度も、2学期に予定している教育講演会を学園PTA行事として、位置付ける。

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
① 本実施 8 年目の丹後学園の経営を行った。組織や会議について当初計画したことが、ほぼ計画通り実施することができた。 ② 丹後学園運営協議会(名称:丹後学園教育応援会)を立ち上げて4年目で、地域への啓発に心がけ、参観の機会も計画通りに設けることができ、学園事業の啓発理解を深めることができた。 ③ 小・中学校だけでなく、こども園・保育所も含めた取組の実践を進め、『主体的・対話的で深い学び』による指導改善をテーマに掲げ、各園所校の実態に合った実践研究が進んだ。保育所やこども園の幼児の状況を学園として情報共有を行うことができ、保幼小の接続に関する学園としての研修が進んだ。 ④ 小1プロブレムを解消するための、保育所やこども園の幼児の状況を学園としての情報共有と交流を丁寧に行った。令和元年度の「教育フォーラム」で発信した「丹後学園」の研究の深化・検証の推	◇「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」の結果(質問紙調査)を踏まえ、確かな学力を育成するために、学園全体で授業改善を確実に進める。 ◇「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」の結果(質問紙調査)等から、児童生徒の非認知能力の変容を把握し、それをもとに授業改善の進捗状況を評価する。 ◇学園の目指す子ども像である「ことばで伝え合い、主体的に学ぶ子」の育成に向けて、研究テーマを「子どもたちが主体的に学ぶ授業づくり～教師主導から子ども主体～」とし、子どもたちが学習の主体者となるよう、「授業づくりの重点」を設定し、研究を推進する。 ◇授業研究会の日時を今年度中に決定しておく。 ◇家庭学習の在り方について検討し、「家庭学習のきまり」、「家庭学習の手引き」を見直す。 ◇各校の「生活のきまり」を、センターファイルサーバーに入れて、それぞれ参照することができるようにしておくことで、自校の「きまり」を見直し考えて、4月から運用することができるようにするなど、学園で情報を共有し、活用できるようにする。 ◇各校の生指事象の交流や研修についての協議などができるようにする。改訂された生徒指導提要の視点を入れた指導の交流により、研修にもなるため、次年度は各学

進の継続が続いている。 ⑤ 2小学校の学年ごとの合同校外学習、修学旅行等を行い、児童の交流が深まると同時に教員の指導方法等の交流も深めることができた。 ⑥ 2学期末に6年生の授業参観と懇談をもつことによって、小中の連携の円滑な接続が組織として積極的にできた。小学校においては、卒業までにつけておきたい力の見通しをもつことができ、中学校においては、各学校の集団の雰囲気や児童の実態や課題などの把握ができ、入学後の見通しがもてた。 ⑦ 小学校在籍中15日以上欠席のある児童の個別記録「丹後学園教育相談ファイル」を作成し、実態や指導・支援のあり方等を円滑に中学校に接続する予定である。 ⑧ 小学校と中学校との教職員の意見交流及び合同研修を通して、相互理解を深めながら、丹後学園の幼児児童生徒の指導課題を共通確認し、学園全体で、就学前から10年間の学びを学園として今後どのように進めていくべきか、保幼小中一貫教育モデルカリキュラムに示されている計画や指導に照らし、言語活動や学び方等の中から、本学園が重点としている指導内容を整理することができた。 ⑨ 実態に応じた指導方法の工夫・改善について、各校ごとの授業研究会を通して研究協議を行い、前進させることができた。また、ゴールとなるめざす中学3年生の姿を共有することができた。 ⑩ 読む力の育成を重点にした研究を継続して行い、目標と指導と評価の一体化を目指す授業づくりの研究が深まった。 今年度の課題 ① 学園の学力・学習状況の実態を踏まえ、研究テーマ（「主体的・対話的で深い学びの授業づくり～生徒指導の実践上の4つの視点を生かして～」や研究授業・研究協議の視点（目指す資質・能力の育成に向けた「主体的・対話的で深い学びの授業づくり」、「教科の指導と生徒指導を一体化させた授業づくり」）を焦点化して研究を進める必要性を感じた。	期に部会を設定していきたい。また、センターファイルサーバーなどを活用し、共通ファイルに入力するなど、担当者が集まって部会が持てなくても定期的な情報交流ができるようにする。 ◇来年度の学園生指部会として、学期に1度は部会を持ち、情報交流や事業実施に向けた協議などをする。また、生徒指導提要の視点を全体に広げ、生徒指導部の方向性を丹後学園の全教員に広げ、実際に教員が動きやすいものにし、生徒の変容が見られるよう実働的な取組にする。 ◇配慮が必要な児童について、小学校での様子が分かるように記録を残し、中学校へつなぐ。 ファイルの色は、小1・4年が青 小2・5年がピンク 小3・6年が黄にする。 ○経営会議は、学園内の教育課題、各会議や部会等の活動状況を把握しながら、恒常的に課題を整理や新たな取組を提起し、学園経営を行う。 ○各会議・部会担当校園所長は、経営会議に事前連絡、事後報告及び決裁を受けながら、実践の方向性・到達点を明らかにし、取組を進めていく。 ○部会は、学力充実部、教育相談部、生徒指導部・保幼小接続部の4部会とする。 ○教育課程会議兼学力充実部会については、教務主任が担当し、学力の調査・分析や学力・授業力向上を図る計画・実践に関わる進行管理、検証等を行う。学園として重点教科は設定しない。 ○令和5年度と同様に、重点的な取組内容として「確かな学力の育成」「コミュニケーション能力」「評価を通した取組の充実」を設定していく。 ○小学校で気になる児童が、中学校で適応しにくくなることもあるので、児童の見立てや支援、家庭との連携を大切にして教育相談活動を行い、小学校での様子（本人・家族・医療との連携等）を丁寧に記録に残し、中学校につないでいく。 ○夏季研修会については、学園全体で幼児期の教育について理解を深めていけるよう、特に時期・実施形態等の工夫が必要である。（夏季全体研修会として、午前中こども園参観、午後より研修会予定） ○学園PTAと連携し、「家庭学習の手引き」を活用しながら、家庭学習習慣の確立を目指した取組を更に進めていく。 ○ケース会議等を通じて、本人を取り巻く生活環境や保護者の生育歴等の実情を踏まえるとともに、子の将来を見据えた指導の支援策を関係機関と連携を図り、対応していく。
--	---

令和 5 年度 弥栄学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」、教育目標

○教育目標 「ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで、たくましく生き抜く子どもの育成」
○目指す子ども像
(知) 知識と技を磨き、活用する子 *自ら課題に取り組む (自主的な姿勢)
(徳) 自他の良さを知り、共に伸びる子 *仲間と知恵を絞る (対話的な学び)
(体) 心身を鍛え、何事もやりぬく子 *解決策を探り、自信をつける (深い学び)

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

1 重点課題
(1) 「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業づくりの推進
・授業実践力等の向上 (他校種研修、授業研究会、全体研修会等を通じて)
(2) 自尊感情の醸成を目指し、生徒指導の実践上の視点を生かした多様な教育活動の推進
・異年齢の交流活動、自尊感情、自己有用感、上級生への憧憬
2 取組みの柱
(1) 学力向上、授業づくり
研究主題: 他者の意見をふまえ、自分の意見を持ち、発信する力をつける
① モデルカリキュラム、丹後学をもとに、教育課程編成を行う。
② 授業公開、事後研を実施し、学力の定着と指導力の向上を図る。(授業研究会)
③ 円滑な接続ができるようⅠ期、Ⅲ期を充実させる。
④ ICT を活用した授業や取組みを推進し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行う。
(2) 交流・連携の取組み(園小・小小連携、小中の交流活動、小学生の中学体験授業)
(3) 学園内のいじめ、不登校、ネットトラブル等の未然防止と解消に向けた取組み
(4) 積極的な公開や情報発信 (HP 等により地域へ発信)
(5) 関係機関、地域との連携 (弥栄学園運営協議会との連携)
(6) 授業力の向上と教育課題解決のための研修会の開催 (研修会、研究協議)

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	1 弥栄学園の組織の活性化 (1) 経営会議、運営会議、教育課程会議との各部の連携 ○経営会議 12回開催 ○運営会議 9回 ○教育課程会議 10回 (2) 各会議、各部の中での各校の交流と分析、指導方針の確認 ○生徒指導部会 4回開催 ○教育相談部会 4回 ○養護部会 4回 ○事務部会 9回 ○学年部会 3回 (3) 全体研修会で子どもの実態や分析結果、指導方針の共有	(1) 組織運営について ア 学園規模に合わせた組織体制の改編後の運営も安定してきており、経営会議が運営会議、教育課程会議、その他学年会を含めた各部会の取組みの進行管理・評価を適切に行うことで、弥栄学園全体の事業・取組みが計画的に進められた。 イ 吉野小学校と弥栄小学校との適正配置後の弥栄学園として保幼小中一貫教育の方向性について、学園組織の改編も含めて整理を進める事ができた。 ウ 経営会議、運営会議、教育課程会議の3会議を定例的に開催することで、各会議が有機的な運営を行ってきているが、細かな調整や各会議の方向性など更に改善が必要である。 (2) 各活動における交流 ア 1中2小1園の特色を生かして計画的にそれぞれの会議、部会が活動を実施し、10年間を見通した一貫性のある指導のための協議・交流を行った。各校園の指導や校風等を理解してお

	○第1回全体研修会 5/2 ○第2回全体研修会 8/21 ○第3回全体研修会 2/14 於：弥栄中	互いのよさや強みを学び合い尊重する機会となり、次年度の組織改編に向けて一定の整理が進んだ。 イ 各会議、各部が指導の方向性を決め 各種活動に取り組むことはできたが、活動によっては各校園の全職員に目的や活動内容等の共有が不十分なものもあった。 (3) 全体研修会 本年度コロナ前同様に3回の全体研修会が全て集合型で開催することができ、学園の方針、教育目標、重点課題、取組みの柱等を周知徹底し、学園全体で共通認識を深めることができた。また、今年度は全体研修会において、通常学級に在籍する特別な支援を要する児童への対応について、外部講師を招聘しての研修を行い、特別支援教育や発達障害等に係る理解を深める場となった。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	2 発達段階に応じた系統的な指導・活動 (1) 家庭学習習慣化に向けて ○家庭学習がんばり週間 (2) 円滑な接続に向けて ○園小接続プランの実践 (3) 保幼小中一貫した授業づくりの推進 ○授業改善で目指す児童の姿の共有	(1) 家庭学習がんばり週間 家庭学習の取組みを中学校の期末テスト期間に合わせて3回実施した。学習習慣を身に付けたり、学習意欲を高めたりするための働きかけや保護者が家庭で取り組めること等について、学園全体で共通理解を図り実施することができた。保護者の感想からも分かるように、多くの家庭で家庭学習や学習環境等について振り返る機会となっている。家庭学習における系統性や学校間・担任間の差異を解消するとともに、各家庭における9年間を通した家庭学習の連続性につながっている。 (2) 保幼小接続モデルプランの実践 2小学校での確実な実践に向け、年度当初に園小接続部会を開催しスタートカリキュラムの確認を行い、実践を行った。本年度はこども園参観の機会を得たので、こども園での指導やねらいについて再度確認し、学園内で定期的に交流することを通して年度末における接続プランの見直し・改善に生かしていく。 (3) 学びのパスポートの効果的な活用 本年度から実施された府の学びのパスポートのデータ活用や分析などから得られた各校の学力実態、非認知能力との相関関係など学園として園・小、小・中合同での分析や改善に向けての手立て、教育課程など令和6年度からの1園1小1中体制の中で整理していく必要がある。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	3 教育活動の連続性・協働性 (1) 授業研究会の取組み ○弥栄中1年 国語 6/14 ○弥栄小 11/29 6年 算数 1年 算数 (2) 園小連携 ○園小合同交流会 9/13 (3) 小中連携 ○部活動体験 2/28 (予定) ○ふれあい交流会 11/8	(1) 授業研究会 ア 今年度は計画通り小1、小6、中1において合同授業研究会を開催することができた。学園の教員が集まり、発達段階を踏まえた指導方法や学習形態等の工夫について共通認識を図ることができた。研究協議においては、各校種による授業観や評価観の差等が縮まるなど、お互いのよさや強み、文化等を理解することができた。 イ 第2回全体研修会では、教育課程会議より第1回授業研究会のまとめについての報告があり、「2学期以降の授業の中で意識していきたいこと」について、全体で確認することができた。 (2) 園小連携活動 園小接続プランに基づいて、児童園児の実態に応じた交流行事を計画通り実施することがで

	○中学校授業体験 9/29 体育 1/18 社会 (4) 小小連携 ○各学年、年間1回の交流行事を実施 (5) 情報モラル教育に向けた取組み ○情報モラル教室 12/6 ・篠原嘉一 様 (NITネットワーク取締役) ○情報モラルアンケート ・インターネットの利用に関するアンケート実施 (小4～中3)	きた。当日は小1が中心となって活動を進め、自己有用感を高めた。 (3) 小小連携活動 ア 部活動体験 (6年のみ) では、中学校への入学に対する不安の一つに上級生との関係があげられるが、実際に部活動で中学生と交流することで、上級生のやさしさに触れ不安の軽減につながり、入学への期待を高めるものとなった。中学生にとっても、自尊感情、自己有用感を感じられる取組みになった。 イ 今年度、小6の中学校授業体験は、実技 (体育) と社会科を実施した。中学校の体育館や教室で授業体験を行うことで、中学校の授業の雰囲気に触れ、学習への不安を軽減して入学への期待を高めるものとなった。 (4) 小小連携 ア 2小の同学年で交流行事や合同の取組みを実施した。特に本年度は令和6年度からの学校適正配置を視野に2学期、3学期を中心に交流授業の機会を複数回計画し、両校の児童の学習を通しての交流を主たる目的に実施した。両校児童も交流の機会を複数回持つことで、お互いの理解に繋がっている。 イ 学年会では、交流行事や合同の取組みの運営について児童数や児童の実態に応じて、子どもたちに力をつけられるように協議しながら取組みを行った。また、教材研究や授業の指導に関して、授業実践や単元計画、指導方法等と交流し、自校の実践にいかすことができた。 (5) 情報を吟味し精査する力の育成 ア 情報モラル研修会 オンラインゲームやインターネットトラブル等に関する知識・理解が深まり、ネット上での様々な事象に敏感に反応、軽微なトラブルでも認知できる情報モラルの力が高まった。啓発講演を実施する中で呼びかけは行ったが保護者の参加者数は少なかった。授業時間内に実施するため、仕事の関係で忙しい時間帯と重複しているため、保護者のニーズに添った啓発活動を検討する必要性もある。 イ 情報モラルアンケート アンケート結果から、各校・学年の特長的な課題等が明確になった。結果については、校内だけでなく、学級懇談会等で保護者にも伝え、家庭と学校の両輪で指導することを啓発した。今後も実態を正確に把握するためにアンケートを実施していくが、1年前のアンケート結果は参考にならないほどデータは常に変化している。定期的に調査等を行い、実態を正確に把握するとともに学園・学校としての対応につなげていきたい。
家庭、地域との連携、情報発信	4 家庭、地域との連携・情報発信 (1) 弥栄学園運営協議会との地域連携・教育環境づくりを進める。 (2) 弥栄学園便り等による広報活動を積極的に行う。 (3) 学校行事等において学校支援ボランティアを積極的に活用することを通して交流を深める。	(1) 運営協議会との連携 弥栄学園運営協議会の活動が4年目となった。コロナ禍での制限も緩和され、学園の取組みを参観していただく機会が通常に戻りつつある中、熱心に参加していただき、地域の方として学校の外から見た弥栄学園について貴重な意見を頂くことができた。学園の活動や教育目標に対してさらなる理解や協力を得るために、啓発活動と同時に運営協議会と学園PTAと連携した活動にも取り組んでいきたい。

		(2) 広報活動 こども園、各学校が、たよりやホームページで取組みを発信するとともに、保幼小中一貫コーディネーターが学園だよりの発信や弥栄学園運営協議会の取組みをコーディネートして、広く学園の活動について啓発を行った。 (3) 学校支援ボランティアの活用 地域のボランティアの方々に、こども園や各学校の教育活動や交流事業に快く多くの支援を頂くことができた。子どもたちと地域の方々との交流や学園に対する理解が深まり、学園・家庭・地域が連携した「横の連携」を深めることができた。
--	--	---

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
1 弥栄学園経営及び進行管理 本学園規模に応じた組織改編により、個々の役割が明確になり、効率化・合理化につながっている。コロナ禍を経て、規制が大幅に解除された本年度はそれぞれの組織が見通しを持って計画的・主体的に活動等を実施することができた。 活動計画を円滑に進めることは大切だが、それを目的化することのないように経営会議で進行管理する必要がある。 令和6年度の学校適正配置により、1園1小1中の保幼小中一貫体制に向けて、既存の弥栄学園の組織体制について、改編案の作成、新しい保幼小中一貫教育の在り方について調整することができたが、組織体制が大きく変わる中での学園経営・運営について更に調整を進める必要がある。 2 発達段階に応じた系統的な指導・活動 「家庭学習頑張り週間」等は、本学園の柱となる活動でもある。それらは各校での実施となるが、学園規模を生かして今後も丁寧に一つ一つの活動を進めていきたい。 コミュニケーション力の向上と合わせて、児童・生徒同士の「教え合い」「学び合い」を意識した授業改善や授業形態の工夫が進んできているので更に深化させていく必要がある。 3 教育活動の連続性・一貫性・協働性 学園規模や立地条件等から交流連携活動は本学園の特長の一つでもある。教育活動の連続性・一貫性・協働性につながったものとする。前例踏襲型の活動とならないようにねらいと目的、中学校卒業時（第3期）の終わりの「生徒の姿」を共通理解しなければならない。 4 家庭、地域との連携・情報発信 こども園、小学校、中学校がそれぞれに、たよりやホームページで各校園の取組みを発信するとともに、学園ニュース（教職員向け）、保幼小中一貫教育だよりの（保護者、地域向け）や学園ホームページでタイムリーに情報を発信し、学園の動きを広報している。また、学園のリーフレットを作成し、保護者や弥栄学園運営協議会、その他地域の方々に配布したり、弥栄学園運営協議会で学園の活動を紹介したりして、弥栄学園の活動についての啓発を行っている。	1 学校適正配置により1園1小1中の体制に対応した組織作りと運営が必要となる。経営会議が主体となり、現状の組織改編、運営・活動方法、位置づけ、活動目的等を再確認しながら年間を通して新しい組織の微調整などを進める。 2 1園1小1中の形態になる中、園小、小中の系統的で一貫性のある指導が非常に重要となってくることを踏まえ、系統的な指導に係る資料（授業改善に係る資料等）の再構築、改定を行っていく。 また、ICTを活用した授業改善、家庭学習の在り方、活用方法などについて利活用を推進する。 3 今後も継続的な情報発信と広聴活動（アンケート調査等）を積み重ね、考察を繰り返すことにより教育活動の成果・課題等を明らかにし、必要な改善を図っていく。

令和 5 年度 久美浜学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」、教育目標

〔教育目標〕

「ふるさとを愛し、意欲的に学び、やさしい心を持ち、根気強く努力する子どもの育成」

〔目指す子ども像〕

(知) 意欲的に質の高い学力を身につけようとする子ども

(徳) 自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子ども

(体) 心身を鍛え、粘り強く最後まで、協力して取り組む子ども

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

(1) 中期的な展望(取組の見通し)

年度	教職員の意識	学力	ギャップ(不登校)
R 3 (6 年次)	・新学習指導要領への対応 ・学力向上の方策を全職員で検討	学力向上試案の策定 (教育課程会議)	接続期の校種間連携充実 事例研の継続
R 4 (7 年次)	学力向上の方策を全職員で検討・実践 新学習指導要領で求められている資 質・能力の育成	学力向上方策の実践、 改善(全学年)	学校に起因する不登校 人数の減少 事例研の継続
R 5 (8 年次)	学力向上の方策を全職員で検討・実践	学力向上方策の実践、 改善(全学年)	早期対応、情報共有の 徹底(全職員の共有)
R 6 (9 年次)	↓	府・全国学力テスト・調 査全学年平均以上(学園)	↓
R 7 (10 年次)	久美浜学園保幼小中一貫教育の継続 した取組の整理とまとめ 次の 10 年を見通し新たな取組の構築	府・全国学力テスト・ 調査全学年平均以上 (全学校)	早期対応、情報共有の 徹底(全職員の共有)

(2) 重点目標

「意欲的に生活・学習に取り組む子どもの育成」～子どもの実態や系統性を踏まえた指導～

(3) 指導の重点

『学力向上』①基礎・基本の徹底 ②主体的に学ぶ力の伸長(授業づくり) ③家庭学習時間の確保

(4) 取組の柱

- ア 10 年間(就学前から中学校卒業まで)の幼児児童生徒の成長発達に全教職員で責任をもつという意識の向上
- (ア) 久美浜学園全教職員がチームとして、みんなでやるという協働意識を醸成する。(対話と理解)
- (イ) 目指す授業として、学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学び」を実現する。その上で、学園テーマとして、「主体的に学ぶ力の伸長」を設定し、すべての教職員で幼児児童生徒が自らの主体的に学ぶ力を伸ばすための教育活動を進める。
- イ 各校園所における規範意識の醸成を基盤とした落ち着いた学校(園)づくり、授業づくり
- (ア) 生徒指導の三機能(自己決定・自己存在感・共感的人間関係・安全安心な風土の醸成)を生かした「わかる授業」と「学級経営・特別活動の充実」により、規範意識を醸成し、学ぶ意欲を育てる。
- (イ) 各学校の重点研究をもとに、各学年単位をベースに授業研究を進める。特に「主体的に学びに向かう力」を育成する授業づくりの取組を進める。
- (ウ) 基礎・基本を徹底し、基盤となる力を十分付けきるとともに、当たり前のことが当たり前にできる雰囲気づくりを進める。
- ウ 子どもの交流行事並びに教科指導交流の推進による行動連携強化
- (ア) 共に学ぶ意識を育て、子ども同士を結び付ける保幼小、小小、小中における交流行事・授業
- (イ) 豊かな教科指導を目指す指導交流(保幼小連携、小小連携、小中連携)
- エ 保護者、地域とともに「久美浜を支える人づくり」の視点に立った取組を進める。
- (ア) PTA、学校運営協議会、地域学校協働本部事業との連携
- (イ) 家庭学習時間の確保に向けた連携

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	(1) 経営会議を中心に組織的且つ丁寧な、実態や課題、目標、方針等の共通理解を図る。 ア 年度当初の学園全体会での提起と全体研修会での全教職員による協議を通して、共有を進める。 イ 夏季全体研修会、園所参観、市授業研究会等の取組を通じて、教職員同士の「理解と対話」の充実を図る。 (2) 保幼・小・中で共通指導内容を確認し、PDCAで改善を図りながら共通理解を深める。	○久美浜学園7校園所が1つの目標に向かう中で、ICT活用や取組の工夫を行い、教職員及び児童生徒園児の交流を確実に実施し、「理解と対話」の継続を図り目標や方針等を共有することができた。 ○園所参観とその後の交流会を実施することができた。 ○市授業研究会の取組を通して、会議や部会の中で授業研究を深め共有することができた。 ○共通指導事項を確認し、指導を継続していくことができた。今後も、具体的な実践共有の場である連携部会、領域部会の運営のあり方等を改善し、引き続き目標やめあて、指導内容を振り返りながら進める。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	(1) 子どもの育ちと指導の一貫性を目指した教育課程編成 ア 考えを深め、コミュニケーション能力を高める学習の推進 イ 郷土への愛着と誇りを持ち、人とつながる力を育てる学習の推進 ウ 保幼小中の接続を意識した教育課程編成 (2) 重点指導 ア 学力向上 (ア) 授業規律の確立 (イ) 基礎学力の定着と活用力を育てる授業づくり イ 不登校の解消 (ア) 規範意識の醸成と基本的生活習慣の確立 (イ) 学級活動の充実と児童会・生徒会活動等自主活動の活性化 (ウ) 自尊感情の高揚 (エ) 保幼・小・中の連携強化 ウ 今日の課題（ICT機器の効果的で安全な取り扱い） (ア) 「ICT活用及び情報モラル」に係る教育の推進 (イ) 人権教育の推進 (ウ) 「リーディングDXスクール事業」指定研究からの学びの共有	○市授業研究会の取組を通して、学園テーマ「主体的に学ぶ力の伸長」を各校で追求し、1人1台端末、ICTを活用した授業づくりを進め、各小中学校での研究成果を交流し共有することができた。 ○ICTを活用した授業づくりについて、教育課程会議で「情報機器リテラシー及び情報モラル指導計画」を作成した。どの段階で、どのような内容で、どのように指導するか、一定の指針を示すことができた。 ○学園内2校による「リーディングDXスクール事業」指定研究で、目指す授業づくりのイメージが広がった。市授業研究会、校内研究会での深まり、ホームページでの取組発信によって学園内での学びと共有が図られた。 ○市授業研究会の取組として3園所の5歳が京丹後市の歌「恋い来い丹後」の創作ダンスをつくり発表した。その作成と練習の過程を「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」としてまとめ掲示物として提示した。その後の子どもの自立や成長につなげる重要な視点を具体化した事例として大変意義のあるものとなった。 ○保幼小連携部会で、アプローチプログラム、小1スタートカリキュラムの実施状況を検証、改善を図った。 ○「資質・能力ルーブリック」の活用等、付けたい力の系統性を検討した。更に重点化の取組を進めていく必要がある。 ○久美浜学園「身に付けたい言語能力表」や小中共通指導事項を確認・検討して取り組んだ。 ○PTA・保護者を巻き込んだ久美浜学園共通の「家庭学習がんばり週間」の取組を進めることで、学習習慣の定着を進めた。 ○教育課程会議では家庭学習時間の確保、養護部

		会ではメディアに係る0期の指導内容を含む保健指導系統表の作成（養護教諭による年長児への出前講座の実施）、生徒指導部では情報機器に関するアンケートを行い、メディア・コントロールについての指導を、学園全体で進めた。 ○教育相談部会では、SCを中心とした事例研修会を実施し、未然防止に向けた具体的方策を検討した。 ○学校生活の充実感を味わわせることや基本的生活習慣の確立を各校で図ること、教育相談部における事例研を通して、不登校の未然防止、解消に取り組んだ。 ○情報機器の望ましい活用（情報モラル）のための講話学習を小3・4年生、中学1・2年生、中学3年生と、3回実施した。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	(1) 全体会、全体研修会、園所参観と分散会、領域部会、連携部会を中心とした教職員の交流と協働 ア 中学校卒業時の生徒の姿を常に意識した協議 イ 児童生徒の実態交流に基づく具体的な取組の推進 ウ 「主体的に学ぶ力の伸長」の系統性を意識した指導を目指す授業研究 (2) 学校、校種間をまたがった指導の推進 ア 小小連携、小中連携、専科教育、出前授業等、人的交流をもとにした協働 イ 振り返りスタディ等指導面での協働 (3) 幼児児童生徒の行動連携 ア 保幼の連携 イ 保幼小の連携 ウ 小小連携 エ 小中連携、保幼中連携 (4) 市授業研究会に向けての取組推進による交流と協働	○市授業研究会に向けての授業研究が、各校で推進された。各連携部でも授業参観を繰り返すとともに、授業内容が検討され、教職員の交流と協働が一気に加速した。 ○夏季全体研修会では、非認知に係る著名な講師を招聘し、全員で話を聞くことができ、「主体的な学び」を進める授業のあり方についての研修を進めることができた。 ○各校の授業研究会の案内を発出し、相互参観ができた。また、「リーディングDXスクール事業」指定研究の校内研究会では、学園内の教員も参加し、各校の研究推進に活かされた。 ○保幼小連携では、年長児メディア指導を養護教諭が行うことができた。小学校のよりよい学校生活に向け、よい機会となった。 ○市授業研究会の発表として、3園所の5歳児が創作ダンスを創り上げた。質の高い5歳児交流となった。 ○小小連携授業では、5年能体験、1年かぶと山公園での生活科の授業、3、4年生のSNS講話学習が実施された。また、5歳児交流会も例年通りかぶと山登山が実施された。 ○小中連携では、合唱祭参観、部活動体験、授業体験を計画通り実施した。保幼小連携では、小学生の生活科へ5歳児を招待、体験入学を実施した。保幼小連携は、中学2年生の職場体験で園所へ多くの生徒が行った。また、中学校吹奏楽部が3園所でコンサートを実施し園児と交流した。 ○児童会・生徒会の合同会議は、対面による会議やリモートでの会議を年3回実施した。あいさつ運動やSDGsの取組を継続して行った。
家庭、地域社会との連携、情報発信	(1) 久美浜学園保幼小中一貫教育に係る目標、活動等の広報及び啓発 ア たよりの発行（月1～2回程度）、有線放送による取組紹介	○様々な取組を様々な機会を通じて広報できた。学園の取組をリーフレットにし、全戸配布をした。 ○町区長幹事会、各地区自治会、民生児童委員協議会等への取組説明が実施できた。学園活動への協力や周知を訴えた。

	イ リーフレットの作成、配布 ウ ホームページによる広報活動 (2) 学校運営協議会の取組を通じた「久美浜を支える人」の協議 (3) 地域学校協働本部事業の積極的な活用等による久美浜町民の学校教育活動への参加と積極的支援 (4) 久美浜学園PTA・保護者会との連携による家庭教育支援	○学校運営協議会は3回実施し、学園基本方針等の承認、活動状況の説明、意見聴取を行った。 3つの部会では、「久美浜を支える人づくり」「学校園所の応援団としての役割」「地域での子どもに関わる活動」等について、多くの意見をいただくことができた。 ○久美浜学園PTA・保護者会があることで、学園の全家庭で「あいさつ運動」「家庭学習がんばり週間」「教育講演会」等の取組ができた。
--	--	---

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
○まもなく一貫教育10年になる。取組の柱に従い、地道に取組を進めてきて、「教職員の協働」も「落ち着いた園所学校、授業」も、「校種間連携」も「地域とのつながり」も、一定できてきた。 ○市授業研究会の会場校（学園）として、教職員が丸となって活動することができ、授業研究等が進んだ。また、園所、学校、校種間の連携も進んだ。 ○文科省「リーディングDXスクール事業」指定研究校が学園内に2校（小1、中1）あり、1人1台端末、ICT環境の効果的活用、授業改善等が進んだ。 ○新型コロナウイルス感染症5類移行に伴い、感染防止に配慮しながら、様々な取組を実施することができ、それぞれの取組のねらいを達成することができた。 ○4PTAと3園所の保護者会と一緒に活動でき、学園PTA・保護者会の基盤がより確かなものになり、全学園での取組が行われた。 ○経営会議の方針のもと、企画運営会議が事業を運営し、教育課程会議が学習指導等に関する内容の具現化を図り、相互に共有して進める運営の機能化を図ることができた。 ○共同事務室ができ、会議の定例化、各種業務の見直し等を進めることができた。 ○小学校への接続の1つの視点としても、年長児メディア指導を実施することができた。 △学園の児童生徒の課題として、不登校の増加がある。部会での事例研修・具体的な取組の協議等、地道な取組の継続が必要である。 △連携部会の取組は回数に限られている中で、ミッションを成果が見えるところまで高めることは難しい。	- これまで積み上げてきた保幼小中教員の「対話と理解」をベースに、保幼小中一貫教育推進計画の共通理解を図る。また、学校園所公開や交流会を引き続き進める中で、保幼小中に係る共通視点を明確にした指導方法等の継続性について、研修及び協議を行っていく。 「リーディングDXスクール事業」指定研究の成果を、学園全体に波及させ、授業改善を図る。 - 学力向上について、拡大教育課程会議において、CBTの結果分析を行い、児童生徒実態や課題を改めて共有し、具体的な取組へ落とし込むことを通して、検証と実践を積み重ねていく。 - 市授業研究会の取組の成果を明確にし、「主体的・対話的で深い学び」「主体的に学ぶ力の育成」に基づく研究推進を進める。 - 授業研究の充実を目指し、教育課程会議が主となり学園の研究推進を行い、連携部会が具体的な授業づくりについて協議ができるよう、計画的に運営する。 - 児童生徒の生徒指導上の課題や不登校の状況から、学園全体での醸成すべき視点（非認知能力等）を見出す。また、肯定的評価を基盤として、学園の教職員の指導観をすり合わせ共通化していく。 - 未然防止について、事例研修や入学説明会への講師招聘等、スクールカウンセラーの具体的な活用を図る。 - 校種間での情報連携や家庭支援連携を進め、不登校の未然防止や早期対応に努める。